目次

ごあいさつ ———— 02

社会を包むアートプロジェクトと地域連携―マルパ MULPA の 5 年間 ———— 03

マルパフォーラム「みんなで “ まなびほぐす ” 美術館」開催 ———— 06

マルパ・ワークショップ　茅ヶ崎市美術館「美術館までつづく道」（第 1 回）———— 07

マルパ・ワークショップ　茅ヶ崎市美術館「美術館までつづく道」（第 2 回）———— 08

マルパ・ワークショップ　茅ヶ崎市美術館「美術館までつづく道」（第 3 回）———— 09

マルパ・ワークショップ　茅ヶ崎市美術館「美術館までつづく道」（第 4 回）———— 10

マルパ・ワークショップ　茅ヶ崎市美術館「美術館までつづく道」（展覧会へむけて）———— 11

茅ヶ崎市美術館　展覧会「美術館まで（から）つづく道」について ———— 12

「親子で楽しむ「ブルーノ・ムナーリ展」」———— 14

マルパ・写真ワークショップ「多文化ユース・フォトセッション in 三浦半島」———— 16

マルパ・ワークショップ　平塚市美術館「ハロウィン仮装作り＆ファッションショー」———— 18

横須賀美術館のマルパプロジェクト―美術館と作業所のミニプラットフォームに向けて——— 20

マルパ実践報告フォーラム 2019・小田原市文化セミナー特別編 ——— 22

マルパ講演会「社会的排除はなぜ起きるのか？－包摂に向けて公共施設ができることを考える－」

——— 24

マルパ総括フォーラム 2021 ——— 26

マルパプロジェクトの活動一覧（2016～2020 年度）——— 28

※本報告書の多くは、博物館・美術館ジャーナル「ミュゼ」（発行：㈱アム・プロモーション）に掲載された寄稿文を再収録したものです。

ごあいさつ

略称「マルパ」。「みんなで“まなびほぐす”美術館 Museum UnLearning Program for All」。

インクルーシブでユニバーサルな美術館教育普及のあり方を考え、模索し、実践するためのプログラムです。構想し実現に着手したのは 2016 年。すでに 5 年前のことでした。

キーワードは「まなびほぐす」。英語の「unlearn」です。

「unlearn」。三重苦という困難を乗り込えたヘレン・ケラー（1880-1968）の言葉として哲学者の鶴見俊輔（1922-2015）が伝えてくれた言葉です。名門の女子大学ラドクリフ大学（現在ハーヴァード大学の一部）に学んだケラーは、エリート教育の学位を得ていながら、それが文字通り自分の身についていなかったので、もう一度「学びなおす unlearn」必要があったのだと鶴見氏に語っているのです。

このとき使われていた接頭辞「un-」には、既存の常識や思い込みや権威主義からいったん離れて、自分の知性を「un-」するというメッセージが込められていました。それは、当時の（現在もなお）教育のシステム全体が、健常者や多数派を優先して構築されていたからだと思います。

「美術館／博物館 Museum」にもそのことは当てはまるのではないかと 5 年ほど前に思うことが多くなりました。そして、21 世紀ミュージアム・サミット（※）のプログラム全体が終わりを迎え、頂き（サミット）ではなく、その裾野の広がりのほうが気になるようになったのです。それが後継事業として位置づけられるマルパの出発点でした。

聳え立つ大きな美術館以上に横に対等に並んでいる大小さまざまの美術館や美術に関する施設や組織の広がりのほうを意識して、背伸びしてきた美術館を「un-」する。もみほぐす。俯瞰的には見えない細部にこそ注意する。多様な価値を受け入れる美術館のあり方を模索してみる。「包摂 inclusive」も当然、そのときキーワードとなります。

「言うは易く行うは難し」。マルパの成果も微々たるものかもしれません。でも、美術館が「遠い」と、とくに社会的に弱者と位置づけられる方々に感じられることをテーマにした 2019 年に茅ヶ崎市美術館で開催された展覧会「美術館まで（から）つづく道」は、まさにそのことを真正面に据えた展覧会であり、マルパと連携して実現したものでした。

新型コロナウイルスの猛威によって、「距離」の意味は劇的に変化し、そのたいせつさも日々感じられるようになりました。また、それと同時に、こころから信頼できるひとやものだからこそ成立する濃密な「接触」のかけがえなさも浮き彫りになりました。

5 年目の節目の年を迎え、いままでの活動を冊子にまとめることにいたしました。これをきっかけにより多くのひとにマルパの理念が伝わることを祈念しております。

2021 年 3 月

マルパ実行委員長　　水沢 勉

※ 2004 年から 2016 年まで美術館のマネジメントや教育普及活動をテーマとして開催された国際シンポジウム（主催　（公財）かながわ国際交流財団）

社会を包むアートプロジェクトと地域連携 ― マルパ MULPA の 5 年間

（公財）かながわ国際交流財団　野呂田純一

マルパ MULPA とは（公財）かながわ国際交流財団（以下、KIF）が神奈川県内の公立美術館 4 館と芸術祭連携組織「相模湾・三浦半島アートリンク」に呼びかけ、2016 年度に始まったアートプロジェクトである。その英語の略称は Museum UnLearning Program for All の頭文字「M」「U」「L」「P」「A」から成り、日本語では「みんなで“まなびほぐす”美術館―社会を包む教育普及事業」としている。

現在、マルパを構成する美術館は湘南及び横須賀三浦地域に立地する、神奈川県立近代美術館、横須賀美術館、平塚市美術館、茅ヶ崎市美術館、藤沢市アートスペースの 5 館である。定住外国人や障がいのある人たちにとって、敷居が高いと捉えられがちな美術館へのアクセス（物理的な問題だけでなく、心理的な問題も含めて）を向上させ、美術館がそうした人々にとって居心地のいい空間に向けて変化する「きっかけ」となる教育普及事業をこれまで数多く企画・実施してきた。（マルパを構成する各美術館の教育普及活動については本報告書の各頁をご覧いただくこととして）本稿ではマルパという地域美術館の連携組織とその社会的意義について、当初から事務局として関わり、ほぼすべてのプログラムに参加した立場から、全体を振り返ってみたい。

1. マルパのキーワード
―「共生／多文化共生」「地域連携」「アンラーン」

マルパには「共生／多文化共生」「地域連携」「アンラーン」の 3 つのキーワードがある。「共生／多文化共生」は設立から 40 年以上、地域に密着して外国につながる人々や団体への支援活動等を続けてきた、（公財）かながわ国際交流財団の基本的な考え方に由来するものであり、いわば、マルパのミッションと言える。

マルパの構成美術館同士はそのミーティング等で相互に行き来できる距離圏内に立地している。また、どの館の主な展示対象も近・現代の作家による作品であるため、マルパは教育普及プログラムを企画するにあたって、作家や作品に関する知見等を共通の土台とすることができるという「連携しやすさ」を持ったプラットフォーム（実行委員会）でもある。

実行委員会というプラットフォームを基盤に持つ、各美術館は、マルパ教育普及プログラムの企画・実施をきっかけに、地域にある多様な主体（自館が立地する地域内の外国につながる人やその支援団体、外国人学校、障がいのある人やその支援団体、地域作業所など）とのつながりを構築しており、いわば、多層的な「地域連携」となっている。

三つ目の「アンラーン Unlearn」は、マルパに特徴的な考え方であり、日本語では「まなびほぐす」という意味で最近は流通しているのだが、これは思想家・鶴見俊輔さんによる訳語に由来する（※）。2006 年 12 月の朝日新聞のコラム「臨床で末期医療を見つめ直す」では、鶴見さんが戦前、ニューヨークでヘレンケラーに会った際に、鶴見さんが大学生であることを知ったヘレンが「私は大学でたくさんのことをまなんだが、そのあとたくさん、まなびほぐさなければならなかった」と言ったこと、それを聞いた鶴見さんが「型通りにセーターを編み、ほどいて元の毛糸に戻して自分の体に合わせて編みなおす」といった情景が想像されたと述べたことが掲載されている。

この「アンラーン」とその訳語「まなびほぐす」について水沢館長に伝えたのは私であったが、そのことに発想を得て、このプロジェクトの中心のキーワードにしたのは水沢実行委員長であった。それは美術館学芸員が既に自分の内面に持つ（大学の授業で学んだような）「美術館像」を、社会包摂的な教育普及活動の実践から得た実体験を基に、まなびほぐし、自分自身の美術館像を得ることができるのではないかとの思いがあったからと思われる。

ともすれば、定住外国人や障がいのある人は教育普及活動の対象として想定されにくい。そうした人たちを主な対象とする教育普及事業を企画・検討するプロセスだからこそ、美術館学芸員が来館者に対するイメージを含めた自らの美術館像を「まなびほぐす」こともできると水沢実行委員長は直感したものと考えている。

2. マルパの全体構造

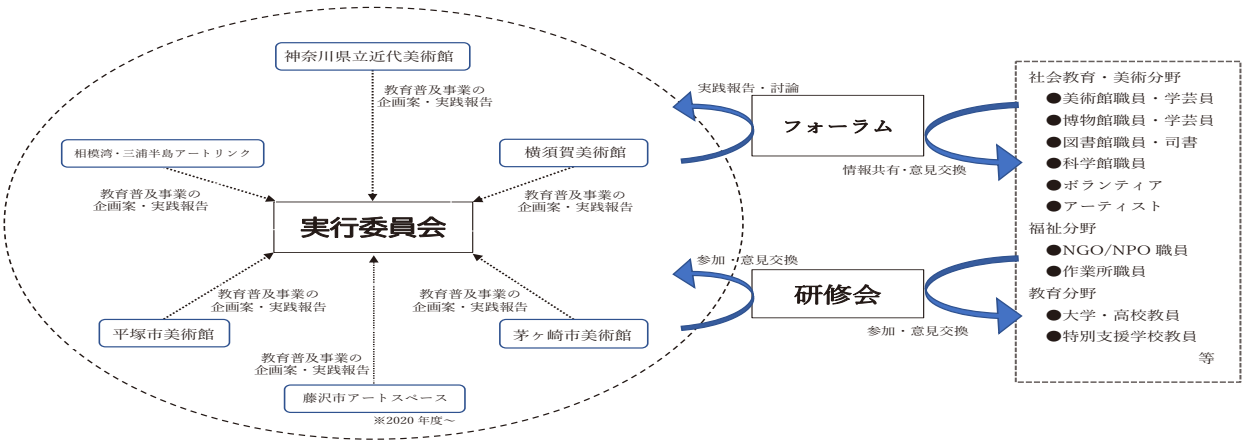
マルパ全体の構造は最初から戦略的に構築された訳ではない。水沢実行委員長は基本構想段階でマルパのイメージについて、美術館の内側を外側（地域社会）に完全に開放するものでもなく、地域美術館の「学芸員コミュニティ」といった閉じたものでもなく、時々のイベントで多様な人々が美術館の内側を出たり入ったりすることができる、いわば、美術館のドアが「半開き」になっているものにしたいと語っていた。

その後、実行委員会で時々に発せられる実行委員の意見が組み合わさって、言い換えれば「走りながら考える」プロセスの中で、最終的に水沢実行委員長のイメージに近い、図 1 のような実行委員会、研修会、フォーラムの三つが有機的に機能する現在の構造となった。

（1）核としての実行委員会

神奈川県内ではほぼ美術館だけで構成される連携組織は初めてということもあり、当初は各館の館長等で構成され、各プログラムの承認・アドバイスを行う運営委員会と、実際にプログラムを企画・実施する学芸員等で構成される作業部会に分かれ、運営委員会と作業部会を事務局がつなぐという構成を取った。しかし、「すべての人々のため」を謳うのであれば、各館の館長と学芸員が同じテーブルについて話し合うのがベターという意見が、キックオフイベントを開催した 2 カ年度目に提出され、3 カ年度目から運営委員会と作業部会は統合され、実行委員会となった。

1か年度に 2〜3 回行われる実行委員会では、各美術館の社会包摂的なマルパ教育普及プログラム（各館で行われる通常の教育普及プログラムとは異なる）について各館のマルパ実行委員（担当学芸員）から計画と報告が提出される。それに対して、実行委員長はじめ、他の委員から意見や質問が出される。この全体共有のプロセスを通じて、「マルパってこういうものだよね」言い換えれば、各館の異なるコンテキ



ストを踏まえながらも、「社会包摂的な教育普及活動ってこういうものだよね」といった相互の確認がなされていった。

また、そのことによって単独の障がい者支援団体や外国人支援団体だけでは持ちにくい、障がい者も定住外国人も誰も排除せず、共にその美術館利用を尊重するという「マルパ」のアイデンティティーが形成されることになった。

（2）研修会―当事者性の重視

作業部会において委員から障がいのある人や定住外国人の事情や気持ち、美術館での動きや美術館にしてほしいことはやはり、障がいのある人本人、外国人本人に聞かなければ分からないことがたくさんあるという意見が提出されたことがあった。その意見により、障がいのある人や定住外国人本人（もしくはその支援者等）を講師とする美術館利用や教育普及プログラムに関する研修会を毎年度、企画・開催することとなった。

こうした率直な意見は、自分たちはアート・美術館の専門家であるが、そうした当事者の人々と直接的な関わり合いがほぼ皆無なので、それならば、実際に聞いてみたい、あるいは、聞いたものを教育普及活動に活かしたいという思いから発せられていて、事務局としては研修会はとても、企画しがいのあるものとなった。

初年度から（2020 年度を除き）年１～３回のペースで研修会を開催してきたが、講演会を開催して意義深いものになったと特に感じた研修会は、障がいのある人たちを講師とした研修会である。

開催会場となった横須賀美術館において、受付・監視職員を主な対象とした研修会には、講師役を障害者対応研修を長年企業に向けに行ってきた㈱ UD ジャパンから、代表の内山早苗さん、松村道生さん（視角障害がい）、西岡克浩さん（聴覚障がい）、岡村道夫さん（車椅子ユーザー）の４名の方にお願いした。この研修会の特徴は、普段、障害のある方に直接、聞きづらいことであっても、研修内容に関係のあることであれば、何でも聞く事ができる点である。障害のある方が本当は美術館利用について、また、美術館の施設内部についてどのように考えているのかについて、本音で語ってくれるところに大きな意味がある。

研修会終了後には、受付・監視職員からは事後アンケートでの意見として次のようなものが寄せられた。

・今までは障がい者の方々が何が不安でどう声を掛けて良いのかが全く解らなかったが、声を掛けるタイミング、声の大きさ、方向等が正しく学べて良かった。障がいを持っている方もひとりひとりお困りのことが違うため、まず伺うことが大切だと考えて仕事をしたいと思いました。今まで私は何も知らなかったと反省しました。

・こちらから何をしたらよいのか、直接聞いた方がよいということがわかり、とても為になったと思います。上から目線ではなく対等に思いやる気持ちは、その美術館全体の雰囲気や愛情となって伝わっていくのではないかと思います。

受付・監視職員の方々への事前アンケートでは「見守る」「声がけはしない」「付添いの方に声をかける」といった姿勢の方が多かった。ところが、事後アンケートからは、（ひとり一人困りごとが異なっているため、付き添いの方ではなく）直接、障害のある方本人にどのようなお手伝いが必要かを聞いた方がよい / 一人の人として対等に向き合うことが大切といった意見が多数出され、認識が大きく変わったことが伺われた。

この大きな認識の変容は、講師のほとんどが当事者自身であり、こうした研修に慣れているため、その言葉に説得力があったこと、また、研修参加者がアイマスクや車いすなど、目が見えない状態での徒歩や、車椅子での視線の高さを体感し、当事者性を深めることができたためと思われる。

（3）フォーラム
―実践事例への共感と気づきの深まり

マルパではこれまで 2017 年のキックオフイベント、2019 年の実践報告フォーラム、2021 年の総括フォーラムと３度、大型のフォーラムを開催してきた。

中でも県西部にある小田原市で開催した実践報告フォーラムでは、関東地方のミュージアムの学芸員・研究者・教員などで、ミュージアムにおける社会包摂について関心を抱く人たちが多数参加した。

このフォーラムではマルパからは、①茅ヶ崎市美術館・藤川悠学芸員による発表『インクルーシブデザイン手法を活用したフィールドワークから表現へ』、②神奈川県立近代

美術館・鈴木敬子学芸員と筆者による発表『外国につながる子ども・若者たちへのエンパワーメント―美術館とアートの力』、マルパ以外からは、③アーツ前橋・今井朋学芸員による発表『生きることに寄り添う表現とは何か～“表現の森”の活動から』、④NPO法人スローレーベルの野崎美樹さんによる発表『共創のための「人」と「環境」をつくる～スローレーベルの舞台芸術の取り組みから』の4つであった。

それぞれの美術館は地理的背景、設置に関わる背景等異なるコンテキストを持っている。しかし、フォーラムで事例を並べて考えると、複数の事例で共通している「コト」が見えてくることがあり、そうした気づきを参加者が持ち帰ることがフォーラムという場の意義だと考えている。一つの実践事例であれば、担当者から話をきけば分かることも多いが、複数の事例を並べてみて初めて気づくことがあり、それを実践報告後のパネルディスカッションで深めることができるのがフォーラムの特徴であろう。

①の企画展「美術館まで（から）つづく道」は視覚障害、聴覚障害、車椅子ユーザーなどさまざまな感覚の「特性」を持つ方達と迷いやすいと言われる美術館までの道のりをアーティストたちが一緒に歩きながらどのような発見があるのかのリサーチをした上で、そこから得たインスピレーションを元にした企画展である。また、③の企画展「表現の森」は、精神障害を持つインドシナ難民の施設や母子生活支援施設、フリースペースなど生きづらさを抱える人たちを支援する団体・場とアーティストが協働して行ったアート活動を企画展の形式で公開したものである。

パネルディスカッションでは、パネリストである平井宏典さん（マルパ実行委員）からの、企画展「表現の森」への一般来場者の反応がどのようなものだったかという質問に対して、今井さんは「誰しもがマイノリティ性を持っているはずなのではないか」「自分自身のマイノリティ性は何なのか」という問いを投げかけ、来場者を議論のプラットフォームに入り込めるよう企画展を設計したと回答した。この回答に対して、モデレーターの杉浦幸子さん（武蔵野美術大学教授）は、藤川さんのフィールドワークを通じた「みんなが感覚特性者」という気づきと丸々リンクすると即座に指摘し、インクルーシブなワークショップには通底する「人」の捉え方があることを来場者と共有した。これについては、アンケート回答でも以下のような意見があった。

・各報告は15分と短い時間でありましたが、それぞれ違う内容でありながら、アートを通して人と人をつなぐ、全員がマイノリティーであり、感覚特性者であること、それを認め合うことからインクルーシブが始まると思いました。

また、アーツ前橋とマルパ構成館を並べて実感された結果として、次のようなアンケート回答もあった。

・自身がかつて考えていた事と類似している想いと実践が行われている事に共感しました。首都に集中している美術館に大行列ができる一方で、地方の美術館は独自の自然に合った試みをしていることが判りました。

アーツ前橋がある群馬県もマルパの構成美術館がある神奈川県も確かに首都圏ではあるが、山手線沿いにある美術館とは立地環境が異なり、それぞれの地域での地理的・歴史的・社会的状況にあった特徴のある美術館活動が来場者に実感されたのであった。

3. マルパの教育普及活動―多様性の中に多様性があることの認識と包み合いの活動

マルパでは2018年度にKIFと神奈川県立近代美術館が協働して、同美術館で開催されていた企画展「ブルーノ・ムナーリ展」に合わせて、社会包摂を目的とするワークショップを実施した。横浜市は開港の地ということもあって長い歴史を持つ外国人学校が9校あるが、一くくりに外国人学校といっても、中華系、朝鮮半島系、ドイツ系、フランス系など多彩である。また、そうした外国につながる児童たちは、学年が上がるにつれて保護者と児童の日本語力のギャップが拡がったり、保護者が仕事で忙しいことから十分なコミュニケーションが取れず、親子間の気持ちの乖離ができやすいと聞いたことがあった。そのため、神奈川県立近代美術館と協働して、横浜山手中華学校と神奈川朝鮮中高級学校双方の、美術教員を通じて、中国・朝鮮半島につながる児童たちを企画展に招待した。

企画展示室においては、担当学芸員がファシリテーターとしてムナーリが気に入っていた図形を探すアクティビティを実施したり、講堂で小型の「ポータブル・アート・ミュージアム」（さまざまな企画展の広報チラシの図版をはさみで切りとり、それをミュージアム風の展示にする）を使ったワークショップを開催した。

両校の生徒とも美術が好きということが土台になって、スパークする出会いとでもいうようなことがいくつも起きた。

・ここ（美術館）に来る前、心臓がドキドキっとしていたんです。でもアイスブレイクの時や昼食の時、（他校の生徒個人名）さんや先生とお話ができて、緊張が解けてどこかに吹っ飛んでいきました！他にもとても良い体験ができてものすごくものすごーく楽しかったです!!!!（事後アンケート）

普段、美術館という訪問経験のない施設で、関わったことのない学芸員という仕事の人たちと初めて会うというだけで、子どもたちの心は緊張していた。しかしながら、その緊張を打ち破るくらいの美術を介した出会いがあったと言える。担当学芸員の後日談では両校の代表格の男子同士がこの出会いは「やばい」といっていたそうである。

先のフォーラムでモデレーターの杉浦さんは締めのことばとして、一方的に内側にある人やモノが外側にある人やモノを包んで出てこないようにするのではなく、自分と他者、場と作品との関係性において「～し合う」ことが必要とのコメントを残してくれたが、それは同じ地域に住みながらもさまざまなコンテキストを持つ定住外国人同士の「包み合い」に最もよくあてはまるのかもしれない。美術館におけるアート活動が単に美術に親しむ、感性を豊かにするということを超えて、マジョリティとマイノリティの包み合い、マイノリティ同士の包み合いに資する有用な手段になることは、こうしたマルパの教育普及活動の実践事例から示されている。

※ 2006年12月27日の朝日新聞に鶴見俊輔さん（哲学者）と徳永進さん（医師）との対談記事「生き死にまなびほぐす」と、対談後の鶴見さんのコラムが掲載された。

マルパフォーラム「みんなで“まなびほぐす”美術館」開催
2017.7.8 関東学院大学メディアセンター

ミュゼ編集部

去る７月８日、横浜市にある関東学院大学関内メディアセンターでフォーラム「みんなで“まなびほぐす”美術館」が開催された。これは（公財）かながわ国際交流財団（以下、ＫＩＦ）が、神奈川県内４館の公立美術館の館長・学芸員やアートフェスティバルの実行委員等に呼びかけ、昨年度に発足したプロジェクト、「マルパ MULPA: Museum UnLearning Program for All / みんなで“まなびほぐす”美術館—社会を包む教育普及事業—」の最初のイベントである。ＫＩＦでは、2004 年から７回にわたり開催した「21 世紀ミュージアム・サミット」の成果を継承した後継事業として、マルパを立ち上げた。マルパの目的は、「すべての地域住民」の「ミュージアムへのアクセス」を保障することにある。

これまで、こうした課題について、ミュージアムの関係者同士で話し合うことはあっても、実際にミュージアム関係者とミュージアムにアクセスしにくい人たちとが一堂に話し合う機会はなかったに等しい。マルパは多様性を認め合う社会を目指して、美術館にアクセスしにくい方々との対話や地元の大学、芸術祭との連携により、既存の美術館像の「まなびほぐし」に取り組んでいる。

フォーラムはⅡ部に分かれ、第Ⅰ部をオープニングトーク「障がいを超えるアートプログラム・美術館とは？」とし、ゲストトーカーにライラ・カセム氏（グラフィックデザイナー・東京大学先端科学技術研究センター特任助教）と光島貴之氏（美術家・鍼灸師）を招いた。ともに自身の障がいを乗り越えながら、障がいのある方々に対してアートを通じた支援を行う実践者である。アートによって身体や言葉の「壁」がどのように「可能性」へと導かれるのか、また、多様な人が集まることのできる美術館について、それぞれのエピソードや思いが語られた。

フォーラム「みんなで“まなびほぐす”美術館」。第Ⅱ部はワールド・カフェで、約 130 人が 14 のテーブルについた。テーブルごとに障がいのある方や定住外国人が入って話し合った。

第Ⅱ部ワールド・カフェでは、14 のテーブルに分かれ、美術館の学芸員やボランティア、NGO 等の支援者、博物館学を学ぶ大学生などが、「いま居るテーブルのメンバーで、やってみたいアート体験って何だろう？」等３つのテーマで話し合った。

全体で約 130 名が参加したが、そのうちゲスト参加者として、障がいのある方々や定住外国人がテーブルごとに１人ずつ入った。各テーブルの参加者は、美術館を訪れることが難しいと感じている人たちと顔を突き合わせて真剣に、美術館の楽しみ方について話しながら、そして楽しく盛り上がった。モデレーターを務めた KIF の野呂田純一氏は、「今回のフォーラムは、マルパにとって最初のイベントでしたが、参加者のみなさんには高い評価を頂いたと認識しています。定住外国人や障がいのある方々などと、みんなが楽しめるアートプログラムへの夢や思いについて語り合えたことは、マルパにとって貴重な体験で、これからのマルパの教育普及事業にも反映されると思います。オリンピックイヤーである 2020 年に向けて、美術館が本当の意味で地域のハブとなれるよう、『社会を包む』ワークショップ等を参加館で実施していく予定です」と語る。

今後の「マルパ」に注目していこう。

美術館の館長、学芸員、ボランティア、NGO 支援者らと「やってみたいアート体験」などを語り合う

美術館のことで定住外国人と話す機会は少ない。気づきも多かった。

話しやすい場にするための演出も工夫されたワールド・カフェ

マルパ・ワークショップ　茅ヶ崎市美術館「美術館までつづく道」（第１回）
2018.2.25　茅ヶ崎市美術館

（公財）かながわ国際交流財団　野呂田純一

1 西岡さんと共に美術館から外へ
2 「梅の花」の色と香りに気づく西岡さん
3 西岡さんのカフェまでの動きに密着
4 粘土でイメージを伝える原田さん
5 研修会講師の鎌倉さん

去る2月25日、茅ヶ崎市美術館が企画するマルパ・ワークショップの第1回が開催された。マルパ（MULPA：Museum UnLearning Program for All/みんなで“まなびほぐす”美術館―社会を包む教育普及事業―）は、（公財）かながわ国際交流財団の呼びかけで神奈川県内の美術館4館（神奈川県立近代美術館、茅ヶ崎市美術館、横須賀美術館、平塚市美術館）と芸術祭連携団体（相模湾・三浦半島アートリンク）等を主体として、平成28年度より運営を始めたプラットフォーム型のアートプロジェクトである。

マルパのメンバーとなっている4つの美術館では、美術館の外にある多様な人々・団体とつながりながら、同じ地域にいる定住外国人や障がいのある方々を、教育普及プロジェクトを通じて「包む」ことが意識されている。

今回を皮切りに約半年間をかける茅ヶ崎市美術館のプロジェクト（全5回）は、茅ヶ崎駅から茅ヶ崎市美術館までの道のりがわかりくいという「マイナス」（課題）を、「インクルーシブデザイン」の手法を活用して、「プラス」（価値）に転換していくという、社会実験的なものである。

障害者を含む「感覚特性者」が歩む茅ヶ崎市美術館までの道のりを、さまざまな技を持った表現者が同行し、その行程中の「感覚特性者」の心や体の動かし方を観察した後、「価値」が何であるかについて、感覚特性者自身の「感情マップ」（アクションの流れに沿って感情の起伏を見える化したもの）を作成することで共有する。その次のプロセスでは、表現者が「例えば、こんなかたち」といった感覚で、共有したい「価値」について、それぞれの感性や技を用いて、「価値」を共有するための「創作」を行う。

第1回のワークショップでは、前段でマルパの研修会として、「インクルーシブデザインを美術に活用する方法」と題した、鎌倉丘星さん（㈱インクルーシブデザイン・ソリューションズ取締役/特性：視覚）による講演があった。

講演後、聴覚を特性とする西岡克浩さん（美術と手話プロジェクト代表）が、茅ヶ崎市美術館から出て、まちなかにあるカフェで昼食を食べ、美術館に帰ってくる行程を、金箱淳一さん（メディアアーティスト）と原田智弘さん（音空間デザイナー）の表現者のお二人、本プロジェクト企画者である藤川悠さん（茅ヶ崎市美術館学芸員）、インクルーシブデザインアドバイザー鎌倉丘星さん、テクニカルサポーターの久世祥三さん、アートディレクター坂本茉里子さんの4名のコアメンバーが、その様子を観察した。

西岡さんは美術館の敷地に戻ってくる際に「梅の花」を見たが、その後の西岡さんの「感情マップ」の作成によって、「色と香り」が共有すべき楽しめる「価値」の一つであることが確認された。表現者等はそれぞれに価値を共有し、粘土にて創作を行った。

執筆者である私もまた、西岡さんを美術館⇔カフェの道のりの間、観察させていただいたが、西岡さんがまちなかを歩くプロセスで、同行者が多いことを「不快」ではなく楽しいと感じていたことがわかり、目からうろこが落ちる思いがするとともに、このインクルーシブデザインの手法がさまざまな「コト」への汎用可能性が高いことに気が付いた。

次回以降、本プロジェクトのメンバーとして、さまざまな感覚特性者とアーティストのコラボレーションが茅ヶ崎での新しい価値を生むことに積極的に関わりたいと感じた。

マルパ・ワークショップ　茅ヶ崎市美術館「美術館までつづく道」（第2回）
2018.3.25　茅ヶ崎市美術館

㈱インクルーシブソリューションズ
鎌倉丘星

1　交通標識で遊ぶそよちゃん
2　三又の道から美術館の入り口へ
3　緑に囲まれた坂を駆け上る楽しさ（自由な空間での負荷）
4　ワークショップ（「価値」を「色」へ）
5　参加者各自の「色」を一つの作品に

3月25日、茅ヶ崎市美術館において「インクルーシブデザイン×デザイン思考」の手法を活用したプロジェクト（全5回）の第2回目が開催された。色彩表現を得意とする画家が、茅ケ崎駅から美術館までの道のりを「2才の子ども」と「お母さん」と一緒に歩き、親子がどのような経路を辿るのか他の参加者とともに観察するという回である。

筆者が普段から仕事としている「インクルーシブデザイン」は、デザイン思考の方法論の1つである。見えない、聞えないなどの様々な「感覚特性」をもった人を、「物」や「事」を生み出す企画設計の段階から包摂し、共に考え創造することで、誰もが使いやすい物、楽しめる事などを生み出す方法である（インクルーシブデザインでは、このような「感覚特性」を持った人を、目が見えづらくなったり、耳も聞こえづらくなったり、足腰も弱くなるなど、誰もが今後体験することになる高齢化社会の水先案内人として「リードユーザー」と呼んでいる）。近年、この方法論は各界から注目され、多くはビジネスにおいて、新規商品の開発や事業の創発などによく活用されている。

ただ今回は、筆者もこれまで体験したことがない「アート」において活用するという試みである。実は、視覚障がい者である筆者にとって、茅ヶ崎市美術館は駅からの標識が少なく、ネットでの地図情報も異なり、決して辿り着くのが容易とは言えない。しかし、そうした課題を単なる文字情報の標記で解決するというこれまでの方法ではなく、インクルーシブデザインの手法を活用し、他の方法を模索することが目標とされているのである。更に、茅ヶ崎市美術館までの道のりに現われてくる地域特性とアートを結び、作品にまでつなげることを目指し、始動したプロジェクトである。

今回の感覚特性者は「2才の子ども」と「お母さん」の親子、そよちゃんと美帆さん。表現者は画家の原良介さん。そして、本プロジェクトの企画者である茅ヶ崎市美術館の藤川悠さん、テクニカルサポーターの久世祥三さん、アートディレクターの坂本茉里子さん、インクルーシブデインのファシリテーターとして筆者を含む4名のコアメンバー。加えて湘南工科大学総合デザイン学科の学生とともに、親子の一連の行動を観察した。

道中、2才のそよちゃんが道にあった標識のポールと建物の狭い隙間を選んで通ったり、道ではない斜面を何度も楽しそうに駆け上ったり下ったり、自動的に止まってしまう水道の蛇口を何度もひねる様子から、親子（特に子ども）が楽しめる「価値」としては「自由な空間での負荷（が好き）」であることがみんなで確認できた。

このことをふまえて、参加者は絵の具を使用し「色」により今回の「価値」を表現した。その際、デザイン思考の特徴である「直感でプロセスを高速回転で考える」を基本に、制限時間3分で簡単なアートワークを創り上げた。同じキーワードでも人によって異なる色のイメージがあることを共有し、最後には画家の原さんより、自身の作品制作にどのように今回の経験が活かせるかについてコメントをもらい終了した。

筆者自身が弱視でありインクルーシブデザイン手法を伝えていく立場として、次回以降も、様々な感覚特性者と表現者のコラボレーションを図り、美術館の新しい価値創造に関わっていきたいと改めて思える回となった。

マルパ・ワークショップ　茅ヶ崎市美術館「美術館までつづく道」（第3回）
2018.6.10　茅ヶ崎市美術館

MATHRAX（マスラックス）/ アーティスト、
アートディレクター　坂本茉里子

1 高砂緑地の花の香りを楽しむ小倉さん

2 美術館へつづく道

3 香りの移ろいを記録する調香師の稲場さん

4 サザンビーチのランドマーク「茅ヶ崎サザンC」へ

5 見つけた「香り」の印象を「音」で

茅ヶ崎市美術館は松林の茂る高砂緑地の奥にある。その道のりは緑豊かで美しく、私たちを別世界へと誘ってくれる。しかし同時に、幾度となく来館者を迷わせてきた。このプロジェクトは、美術館へのアクセスをテーマに、そんな「問題」を「価値」に変えて、沢山の人に楽しんでもらうために始まった。普段、美術館へのアクセスが難しいと思われる人々（障がいがある方、小さな子ども連れの方、外国から来た方など）が、このテーマに制作を通して挑む様々な表現者たちとともに、着想・構想段階から共に関わっていくという包摂的、かつ実験的な試みである。

また、このプロジェクトでは「インクルーシブデザイン×デザイン思考」という手法を用い、参加者が共に観察・創作を行うことを通して、新たな価値を生み出していく。当初、筆者には、すでに作品制作における独自の方法論を持つ表現者たちに、なぜデザインの発想から生まれた方法論を適用するのだろう？という疑問もあった。だが、この手法を用いることにより、参加者たちの環境がフラットになり、その人独自の生き方、考え方、価値観、制作方法、感性がより際立って見えてくるようにも感じるのである。

6月10日（日）に開催された第３回目は、感覚特性者（特性：視覚）である小倉慶子さんと盲導犬のリルハちゃん、表現者である調香師の稲場香織さん、アートユニットのMATHRAX、プロジェクトのコアメンバーが参加。美術館から海へとつづく道のりの中での感覚特性者の観察を中心に、茅ヶ崎の道の香りを感じながら歩くフィールドワークを行った。

美術館を出発するころには、すでに梅雨らしい雨が降り始めていたが、美術館のある高砂緑地は、防風を兼ねる松林に覆われているため、香りもクリアに感じられる。稲場さんに花の名前を教えてもらいながら、一同、緑地の梅の実やクチナシの花のみずみずしい香りをたっぷりと吸い込んだ。サザン通りを海に向かってまっすぐ歩いていると、次第に小倉さんと盲導犬のリルハちゃんが歩くスピードをアップしていくのが分かった。私たちはこのふたりに追いつくために小走りにならざるをえなかったほどだ。ふたりには高揚感をもたらす、ふたりだけの歩き方があり、それを実践して楽しんでいる。まるで軽快な音楽を感じさせるような歩き方は、私たちの中の「見えない人」のイメージをすっかり一掃してしまった。

美術館に戻り、感覚特性者とのフィールドワークから得た気づきと香りをあげてみると、そこから３つの言葉が生まれた。『グラデーション』（道中、めくるめく変化する香り）、『レイヤー』（路地の交差点で交わる香り）、『クリア』（この日の透明感のある香り）。これらの言葉を題材に「香り」を「音」によって表現するワークを試みた。香りも音も目には見えず、その体験は「時間軸を伴う質の変化」がある点において類似しているといえる。身の回りにある日用品や簡単な楽器を使って奏でる音は素朴ではあったが、稲場さんによれば、音の感じ方と香りづくりには共通する部分もあるという。最後に参加者全員で、今までに作った音を多重録音し音の作品を作ってみると、３つの音の要素がめくるめく現れ、そのたびに、何かが立ち上がっては混ざり合うような不思議な気分を体験した。「香りを聴く」と表現することがあるように、近く茅ヶ崎の音のパフュームをかぐことができる日がくるかもしれない。

マルパ・ワークショップ　茅ヶ崎市美術館「美術館までつづく道」（第4回）
2018.7.29　茅ヶ崎市美術館

茅ヶ崎市美術館　学芸員
藤川　悠

1 自転車用スロープで車椅子で滑りおりる和久井さん
2 海の家で一休み
3 視線の高さの違いを確認
4 感情マップをもとにキーワードを見つけ出す作業
5 フィールドワークをインスタレーションで表現

筆者が勤務する茅ヶ崎市美術館の周辺は細い道が入り組み、標識も少なく、迷いやすいことで知られている。実際に、迷ってしまい困ったという意見を受付で頂戴することもある。しかし、このような当館までの道程を“迷路のようで楽しんだ”という弱視の方が現れた。

これまで「迷う」「分からない」という言葉がネガティブな言葉として使われることが多かった中で、この弱視の方による分からないことを楽しむ発言は、筆者にとって驚きとともに今回のプロジェクトの企画を考えるきっかけとなった。

一見マイナスに捉えられやすい事柄を他者の異なる感覚や力をかりることで、何か良い方向に捉え方を変換することができないか。そのような思いから「道」をテーマに、これまでハード面で語られることの多かったアクセス問題について新たな切り口で取り組み始めたのが「美術館までつづく道」プロジェクトである。そして、異なる感覚を技や智恵をかりるにあたり、高齢者、障がい者、外国人など多様な人々を、デザインプロセスの最初から巻き込む「インクルーシブデザイン」の手法を活用した。2018年の2月から約半年間かけ、美術館周辺をアーティストである「表現者」と、視覚障がい、聴覚障がい、車椅子ユーザーなど身体に不自由を抱える人や小さな子と親など、異なる感覚をもつであろう「感覚特性者（*1）」が、筆者を含むコアメンバーとともに道を歩き、迷い、遊び、道中でおこる様々な出来事を体験するフィールドワークを4回にわたり実施した。

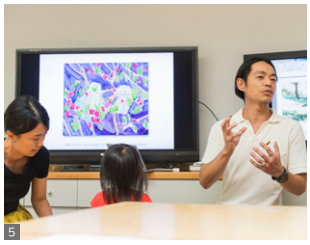
今回紹介する7月29日（日）に実施した第4回目は、前日の台風12号が去り晴天に恵まれた絶好のフィールドワーク日和となった。感覚特性者（特性：車椅子ユーザー）である和久井真糸さんは以前茅ヶ崎に住んでいた時期もあり、コンパクトな電動車椅子を自由自在に操り、一人で車も運転されるアクティブで明るい女性。表現者は、アメリカ西海岸生まれのアーサー・ファンさん。アーサーさんは自分が歩いた一日の道程の記憶をもとにした作品で知られ、普段は理化学研究所で脳科学の研究をしている。

フィールドワークの流れは、美術館周辺の道を一緒に歩き、主に感覚特性者の和久井さんが歩く様子を観察し、道中でおこる様々な出来事を体験する。美術館に戻ってからは、道中の出来事や気付きを参加者で確認しつつ、和久井さんのそのときの感情と照らし合わせた「感情マップ（*2）」を作成する。最終的には、気付きを価値に変えるであろう「キーワード」を見つけ出し、それをもとに簡単なアートワークを行った。

美術館を出発すると和久井さんは持ち前の明るさで同行者を先導し、あえて狭い道を選び進んだ。道中では、190cm近いアーサーさんの身長と車椅子の和久井さんの視線の高さよって見える景色の違いを確認。そして、海へわたるための国道134号線の陸橋にさしかかると、和久井さんはスロープの方向に進むのではなく、通常歩行者が自転車を押して進むための幅の狭いスロープをあえて選び上り始め、下りる際も車輪がはみ出てしまうほどの狭いスロープを車椅子で颯爽と笑顔でくだっていった。そして、夏の時期に現われる「海の家」へ砂に車輪をとられながらもぐんぐんと進んだ。その姿は、我々の想像をはるかに超え、アクロバチックな車椅子の動きは終始驚きの連続であった。美術館に戻り導き出されたキーワードは「狭い・低い・挑戦」で、このキーワードにはどうやら道を楽しむヒントが隠されているようであった。1人で歩く道とは明らかに異なる視点で茅ヶ崎の道を体験することとなったアーサーさんが、この体験をもとに今後どのように作品世界をみせてくれるのか楽しみな第4回となった。

マルパ・ワークショップ　茅ヶ崎市美術館「美術館までつづく道」（展覧会にむけて）
2018.8.26　茅ヶ崎市美術館

茅ヶ崎市美術館　学芸員
藤川　悠



1 表現者たちの作品制作へ向けたプレゼンテーション
2 展覧会に向けての集合写真
3 映像と音が振動で伝わる体感作品を探る金箱さん、原田さん、西岡さん
4 香りと音を組み合わせた表現を探る稲場さんと MATHRAX さん
5 自由な動きを絵画で表現するアイデアを話す原さん

2020 年に向け、各地で障がい者や高齢者へ向けた様々な試みがなされている。そして、今回「美術館までつづく道」プロジェクトで活用した、高齢者、障がい者、外国人など多様な人々をデザインプロセスの最初から巻き込む「インクルーシブデザイン」の手法も各界から高い注目を集めている。今回のプロジェクトは、アートの表現にインクルーシブデザインの手法を活かすことができるかどうか実験的な試みである。構想から約 1 年半、当館周辺で 4 回にわたるフィールドワークを実施。

その第 1 回は、メディアアーティストと音空間デザイナーと聴覚障がい者とともに歩いた「聴覚の感覚特性者と歩く道」(2018.2.25)。第 2 回は、画家と 2 才の子とそのお母さんとともに歩いた「小さな感覚特性者と歩く道(2018.3.25)。第 3 回は、香りの研究者とメディアアーティスト、視覚障がい者と盲導犬とともに歩いた「視覚感覚特性者と盲導犬と歩く道」(2018.6.10)。第 4 回は、脳の研究者であるアーティストと車椅子ユーザーとともに歩いた「車椅子ユーザーの感覚特性者と歩く道」(2018.7.29)。この 4 回にわたるフィールドワークは、これから 2019 年の夏に開催する茅ヶ崎市美術館の企画展「美術館まで（から）つづく道」へとつづいていく。4 組の表現者たちは、フィールドワーク後も感覚特性者とのやりとりをつづけており、展覧会に向けた作品制作へと歩みを進め始めている。その経過発表として、8 月 26 日に近隣の美術館関係者を招いての報告会が行われた。表現者たちの作品構想は、フィールドワークをもとに丁寧に組み立てられ、美術館という場が頼ることの多い視覚のみならず、聴覚、触覚、嗅覚などあらゆる感覚を用いて鑑賞する新たな作品が展開されようとしていることが報告された。更に、展覧会では当館所蔵作品の中から萬鐵五郎、小山敬三、三橋兄弟治（いとじ）らが茅ヶ崎を舞台に描いた作品もあわせての展示を計画しており、当館が立地する茅ヶ崎を舞台に異なる時代を生きたアーティストたちの表現が交差する場となる。時代、分野、感覚のカテゴリーを越え、多様な人々を包括する試みの展覧会となる予定であり、当事者の技や智恵、特性を、アーティストが新たな表現活動へとつなげることで、これまで助ける側、助けられる側という両者の関係性にも揺さぶりをかけることとなるだろう。また、同調・共感が求められることの多い現代において、障がい者、弱者、表現者、鑑賞者、マイノリティ、マジョリティの関係性の枠を越え、多様な人々が異なる感覚を持ち生きていること、その違いを認識し、尊重し、楽しむことで、一人一人が特性をもつ「感覚特性者」として、世界を捉え直す契機となることを期待している。来館者が美術館から出た一歩先につづく道を、これまでとは違う視点で捉えられることを目指したこのプロジェクトと展覧会は、人々の認識を変えるという美術の本質にも迫るものとなるだろう。

*1 感覚特性者…主に障がい者の感覚に焦点をあて、障がいとしてではなく、その人の特性として呼ぶ造語。
*2 感情マップ…インクルーシブデザイン手法の 1 つの行程。出来事を記した付箋をもとに、その出来事に対し当事者本人（ここでは感覚特性者のことを指す）の物事の捉え方や感情を、出来事のあった時間軸と感情の起伏軸で現わしていく方法。この方法では、周囲から想像する当事者の思いと当事者本人との意識の違いが明確になることがメリットといえる。

〈関係者リスト〉
フィールドワーク（第 1 回）
表現者：金箱淳一（メディアアーティスト／産業技術大学院大学助教）＋原田智弘（音空間デザイナー／ソラソレ堂）
感覚特性者：西岡克浩（美術と手話プロジェクト代表／特性：聴覚障がい）・和田みさ（手話通訳）・市川節子（手話通訳）
フィールドワーク（第 2 回）
表現者：原良介（画家）
感覚特性者：原そよ（2 才女の子）＋原美帆（お母さん）
フィールドワーク（第 3 回）
表現者：稲場香織（資生堂グローバルイノベーションセンター香料開発グループ研究員）＋ MATHRAX〔久世祥三＋坂本茉里子〕（テクニカルアドバイザー／グラフィックデザイナー／メディアアーティスト）
感覚特性者：小倉慶子（小説家／特性：視覚障がい）＋リルハ（盲導犬）
フィールドワーク（第 4 回）
表現者：アーサー・ファン（美術家／理化学研究所脳科学総合研究センター研究員）
感覚特性者：和久井真糸（エーラスダンロス症候群患者会／特性：車椅子ユーザー）
〈協力者〉
インクルーシブデザインアドバイザー：鎌倉丘星（（株）インクルーシブデザイン・ソリューションズ／特性：視覚障がい・呼吸不全・車椅子ユーザー）
記録：香川賢志（写真家）、金明哲（映像撮影）、谷津光輝、岡崎淩大（湘南工科大学学生）
〈主催〉公益財団法人茅ヶ崎市文化・スポーツ振興財団
〈協力〉湘南工科大学総合デザイン学科／
（株）インクルーシブデザイン・ソリューションズ

茅ヶ崎市美術館　展覧会「美術館まで（から）つづく道」（会期：2019.7/14-9/1）について

茅ヶ崎市美術館　学芸員
藤川　悠

1 原良介《道・階段》
2 金箱淳一＋原田智弘《音鈴（おんりん）》
3 MATHRAX《うつしおみ》（香料開発：稲場香織）
4 アーサー・ファン《茅ヶ崎散歩記憶と記憶細胞》
5 稲場香織《道の香りパレット》

これまで総勢20名を越える人々が関わり合い実施してきたフィールドワークから、いよいよ展覧会が立ち上がった。フィールドワークの段階では「美術館までつづく道」としていたプロジェクト名は、展覧会では作品を鑑賞した来館者が美術館から一歩出た先にも鑑賞体験がつづくようにとの思いを込め、タイトルを「美術館まで（から）つづく道」に変更した。そして、アーティストや研究者がフィールドワークの体験をもとに制作した作品は、視覚、聴覚、触覚、嗅覚など、あらゆる感覚を用いて鑑賞する新たな作品が展開された。

【作品紹介】

●金箱 淳一＋原田 智弘
《音鈴　おんりん》

天井から吊るされた36枚におよぶ短冊型の電子デバイスは、風に揺られるとそれぞれ異なる音を響かせ、先端につけられたLEDの小さな光は、風の変化とともに瞬く。聴覚と視覚による幻想的な空間をつくった金箱と原田。意識したのは、聴覚障害者と歩いた道で皆が同時に感じた海からの風であった。作品に触れるのではなく、見ること、空気の動きを感じること、そして、誰かと一緒に過ごすこと。1つの失われた感覚は、1つの感覚だけでなくその他の多くの感覚により補われていることを、居心地の良い空間で緩やかに示した作品となった。
〈鑑賞者コメント〉吹きかける息で音と光が蛍のように舞い、幼い頃を思い出した。

●原　良介
《土手の上で》《道／階段》

絵画作品《道／階段》は、画面上部の空色に向かい、中央に階段のベージュ色、左右には草木の緑色が、層となり積み重ねられている。作品は、2歳の子が道を進むことより斜面や階段を楽しみ駈け登る様子から着想を得ており、見る者の視点を上へ導き、さらにその先に広がる世界へと誘う。日本画家・東山魁夷の名作《道》と同じ3色で描かれながら、画面下の陰影が単純な風景画とはせず、あたかも風景が物として置かれているような重層性を提示している。絵画における二次元からの脱却を図る原が、新たな境地を開く作品となった。
〈鑑賞者コメント〉木漏れ日の中、歩いて入っていけそうな世界が拡がっていた。

● MATHRAX〔久世祥三＋坂本茉里子〕（香料開発：稲場香織）
《うつしおみ》

ロの字に組まれた木製のひとつづきの「道」。その上には異なる形の木片が133個も並び触覚・聴覚・視覚・嗅覚に訴えかける世界が作られた。オブジェに触れると1つ1つが違った音色を発し、室内は空の一日の変化を辿るかのように光の色合いを変える。そこに添えられた夏のむせかえるような草の香り。視覚障害者と盲動犬が共に、風を切って進む様子から発想された作品。作品完成前に急逝した盲導犬リルハへの鎮魂の意が込められる共に、新たな生への輪廻のイメージも想起させ、人が前へと進む原初的な力を呼び起こした。
〈鑑賞者コメント〉指で触れて進むと、音や光や香りの変化で目を閉じていても景色が見えた。

●アーサー・ファン
《茅ヶ崎散歩記憶・記憶細胞・散歩記憶ドローイング》

1971年、「場所細胞」という細胞が脳の記憶を司る海馬内に発見された。この画期的な報せは、脳の研究者でもあるアーサー・ファンが、日々歩いた道の記憶を線や記号で地図のように描

く現在の作品制作のきっかけとなった。細胞を想起させる無数の円形状の作品は、今回ショーウィンドウ内の床面、壁面、更には天井からと様々な高さに展示された。車椅子ユーザーと過ごして気づいた互いの視点の高さの違いがもとになり挑戦した展示方法である。日々の散歩リサーチからの作品は、目的地までの“あいだの道”を人々に意識させるものとなった。
〈鑑賞者コメント〉普通の何気ない日常が愛おしくなった散歩記憶の作品

●稲場 香織《道の香りパレット》
香りの研究者である稲場は、視覚障害者が香りを道しるべにしているのではないかという思いから道で捉えた6つの香り（松林、クチナシ、ドブ、海、コーヒー、コンビニ）をケースに納め、外に持ち出して歩く、嗅覚による探検用キットをつくった。人の何倍もの嗅覚をもつという犬と香りのプロである彼女の特性を活かした本作は、人によって香りの印象が大きく異なったことから、誰もが同じ感覚を持っているわけでないことを改めて明らかにし、それぞれの嗅覚世界を開くきっかけとなった。
〈鑑賞者コメント〉パレットを持っているだけで嗅覚に意識がいき、海が近づいているのが分かった。

【来館者の声】
アンケートには「美術館の印象が変わった」「愛おしい展覧会」「おおげさでなく印象深い」「美術館を初めて楽しいと思った」「障害者も一緒に楽しめることが非常に良かった」「展示がみやすい」「普段の日常では感じられない感覚が呼び覚まされた」「心地が良くずっと鑑賞してみたい気持ちになった」「見えなくなってから初めて美術館に来た」「今までの美術館とは違う鑑賞方法にとまどい、自分の固定観念から外れることの難しさを知った」「五感、障害など日常生活における我々の行動について考えた」「今生きている日常や何気ない風景もアートになるのだと気づいた」「やっぱり来るまでに迷った！少しうれしい！」などの記述があり、地域を舞台にした作品であったことで地元の来館者からは「いつもぼんやり歩いていた道、もったいなかったな」「この地がもっと好きになった」との感想も頂戴した。そして、「美しい体験がバリアそのものを融解させた」という感想は、何よりこの展覧会の意義を伝えてくれるものであった。

【本展での美術館の取り組み】
さまざまな特性のある方と時間をともに過ごすことで見えてきた気づきを下記の取り組みに活かした。
①点字チラシの作成・・・目の不自由な方もご来館くださいの気持ちを込めた
② QR コードの配置・・・目の不自由な方に向け、スマートフォン等での読み上げ機能に対応するように、テキストデータ入りの QR コードを会場パネルに配置
③リーフレットの作成・・・視野狭窄の方に向け、パネルのテキストが手元でも見られるように作成。QR コードの位置を示す「切り欠き」が入ったものも用意
④「言葉の地図」の作成・・・盲導犬ユーザーとともに駅から美術館まで歩き、言葉による案内文を作成（当館 HP のアクセスページに掲載中）
⑤コミュニケーションボードや筆談ボードの設置・・・耳の不自由な方に向けて。緊急時のために各所に非常灯も設置
⑥美術館を楽しむためのご案内を配布・・・「サポートが必要な方はお知らせください」という一文とともに照明が暗い展示室を事前にお知らせすることで安心して展示をみていただけるようにご案内
⑦低い高さで作品を展示・・・子どもや車椅子の方も作品が見やすいように

【振り返り】
世の中は物事や他者への理解を深めようとする力が弱まりつつあるのではないかとい感じる機会が多い中、美術館までの道のりが分かりにくいという状況に対し、弱視の方が楽しむ力で挑戦する姿勢に感化され、美術館を取り巻く地勢、まち、障害者を含む異なる特性をもつ人々、多様な価値観などを絡めながら、物事を捉え直すという試みが展覧会のスタートであった。表現者たちには「他者と美術館のまわりを歩く道のりから作品のテーマを見出して欲しい」という無茶なお願いに応えていただいた。フィールドワークを重ね見えてきたのは“誰かと歩くと一人一人感覚が異なるから面白く、同じ道でも違う世界に見える”ということ。障害の有無を超えたこの一見シンプルな結論に、参加した皆が辿り着くのはそう簡単ではなかったように思う。しかし、その分、作品はあらゆる人へ届けるために強度を増し、観覧者からは「様々な感覚が呼び覚まされた」「閉じていた何かが少しずつ開かれていった」などの感想があった。
自己の感覚を研ぎ澄まし、多様な物事や他者とどこまで向き合えるかを問う展覧会となった。

【展覧会の紹介映像】
《作品の紹介映像》2′34″

《香りパレット紹介映像》2′05″

親子で楽しむ「ブルーノ・ムナーリ展」
2018.6.3 神奈川県立近代美術館 葉山館

（公財）かながわ国際交流財団 野呂田純一

神奈川県立近代美術館・葉山館では企画展として、本年４月７日から６月10日まで世界的に著名なイタリアの作家・デザイナーである、ブルーノ・ムナーリ（Bruno Munari）の回顧展「ブルーノ・ムナーリ　こどもの心を持ちつづけるということ」（以下、「ブルーノ・ムナーリ展」）を開催したが、同館の水沢勉館長によれば、ムナーリが自分の子どものために作ったそれらの作品は「国籍や文化を問わず」、世界中の子どもたちに受け入れられてきた。

約160年前の横浜開港からの歴史もあって、横浜市内に設立された外国人学校は比較的多く、現在9校ある（※県HPに各種学校として掲載された学校数）。昨年７月に開催したマルパ・キックオフイベントでは、その外国人学校の内、３校から美術科の先生３名の参加を得たが、今回のワークショップではその先生方のうち２名を引率教員として、教え子やその保護者を「ブルーノ・ムナーリ展」に招待した。

今回の企画の着想は、筆者が以前、小学生の子どもを持つ、ある外国人ママから、子どもの年齢が上がると、ママより日本語をうまく話せるようになるため、親子間のコミュニケーションギャップが生まれやすいと聞いたことにあった。子どもとその保護者が一緒にアート作品を鑑賞することで、親子間のコミュニケーションを増やせないかと思い、同館籾山昌夫普及課長と相談したところ、「会話を楽しむ日」（同館が展示室内で来場者同士の会話をできる日としている）である６月３日（日）にワークショップを開催することとなった。

展示室内でのギャラリートーク

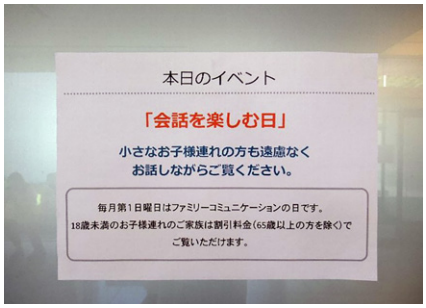
当日は横浜山手中華学校と神奈川朝鮮中高級学校の２校から初級部（小学生）、中級部（中学生）、高級部（高校生）の子どもたちとその保護者、引率教員（王節子先生、姜泰成先生）合計19名が参加したが、外国人学校の子どもたちの絵画作品を展示する企画展を、横浜市内の図書館等で開催している「外国人学校の子どもたちの絵画展実行委員会」のスタッフの方々３名（加藤佳代さん、藤原敏雄さん、平澤咲さん）が、両校を結ぶボランティアとして参加した。

水沢館長による、子どもたちを迎えたウエルカムスピーチの後、両校の子どもたち同士が交流を深められるよう、自己紹介を含むアイスブレイクとグループごとの昼食会を実施した。普段、同じ地域に住みながらも、つながりがない両校の児童・生徒であったが、参加した子どもたちがそれぞれの学校で美術部やアトリエに所属していることもあって、互いにどんな作品が好きか、あるいは、普段、どんな作品を作っているか等を話題にして盛り上がった。

打ち解けた雰囲気の中、参加者たちはムナーリ展担当学芸員の髙嶋雄一郎さんによるギャラリートーク（解説）を聞きながら、展示作品を鑑賞した。髙嶋さんはムナーリが気に入っていた図形として「○」「△」「□（正方形）」

中庭ではこけし（イサム・ノグチ）がお出迎え

回顧展の会場入口



当日は「会話を楽しむ日」

「ポータブル・アート・ミュージアム」の説明をする鈴木さん・八木さん

「美術館」づくりに熱中

ひとりひとりの「美術館」への思いにみんなで耳を澄ます

があり、それらは展示された作品の中にもあると言う。その図形を先ほど昼食を一緒に食べたグループごとに探し出すアクティビティーが行われたが、アートは好きでも、普段は来ることのない「美術館」という施設の中で子どもたちは目をキラキラさせながら、展示室内の作品から図形を探し回った。

続けて、教育普及担当の学芸員鈴木敬子さん・八木めぐみさんがファシリテーターとなって、同館で開発された創作キット「ポータブル・アート・ミュージアム Portable Art Museum」を使ったワークショップが行われた。

国内の数多くの美術館から同館に送られてくる、様々な企画展の広報チラシを使って、小さく、持ち運び可能な「美術館」を作るこのキットは、会期が終わったチラシを再利用しながら、美しい図版で自分だけの「美術館」を作る喜びを味わい、最後は来館の「お土産」として持って帰ることもできる、まさに一石三鳥のようなキットである。

参加者は自分だけの「美術館」を作り上げた後、最後は集まって、一人ひとりがその「美術館」への思いを語ったが、自らが熱心になった分だけ、他の参加者の思いに耳を澄ますことができるのだろう。互いに他者の思いをできるだけ聞き取ろうという熱気が自然と生まれ、年齢や文化的な背景の異なる人同士がこんなにもアートによってつながれるのかという、さわやかな感動を覚えた。学芸員の鈴木さんが、参加者の「美術館」の発表それぞれに対して、「いいね！」（よいと思われる点）を他の参加者が言葉として贈ることを思い付いたことがそうした熱気や感動につながったと思われる。

マルパではこの２年近い活動から「美術館」という文化施設が、障がいのある方々や定住外国人と継続的につながっていくには、美術館側の「ウエルカムな姿勢」が大切であることを学んだ。そうした「ウエルカムな姿勢」が土台になることで、子どもたちが安心して、インクルーシブなワークショップに参加できることを改めて感じるワークショップとなった。

※神奈川県HP
http://www.pref.kanagawa.jp/cnt/f544/p757277.html

ギャラリートークの前に鑑賞ルールの説明をする高嶋さん

マルパ・写真ワークショップ
「多文化ユース・フォトセッション in 三浦半島」

（公財）かながわ国際交流財団　野呂田純一

当財団と神奈川県立近代美術館は、2019年3月3日(日)及び3月10日(日)の2日間、フォト・ジャーナリストの大藪順子（おおやぶ・のぶこ）さんを講師として、外国につながるこども・若者たちを対象した撮影会を開催した。この撮影会は学校や地域での孤立しがちな、外国につながるこどもたちがカメラによる自己表現を通じて、仲間づくりや自己肯定感の向上を目的に実施されたものである。

主に横浜市中区（若葉町）や平塚市など外国人集住率が高い地域に住むこどもたちに参加をよびかけ、集まった参加者には一人一台の一眼レフカメラがニコンの協賛により貸し出された。

延べ27名の参加者（外国につながるこども・若者たち）は、下は小学3年生から上は留学生、元留学生、社会人の30代前後の方々まで年齢に幅があった。中には、普段、見たことのない風光明媚な風景を、はじめて触る一眼レフカメラで撮影することに気持ちが高まり、バスの途中で歌を歌い出すこどももいた。以下、3月3日、10日の撮影会、4月13日の作品公開について記していきたい。

撮影会①　3月3日(日)

そもそも写真が何であるのか分からないこどももいるため、最初に参加者は講堂に集まり大藪さんによる簡単な写真についてのレクチャーが行われた。その後、美術館周辺の屋外彫刻を回って、美術館とはどんな場所なのかを肌で感じる機会を持った。撮影会場となった神奈川県立近代美術館の企画展示室では、戦後の抽象彫刻の代表作家・堀内正和の展覧会「おもしろ楽しい心と形」が開催されていた。会期中は第2・第3展示室で作品の写真撮影が可能であり、参加者たちは接写を試みたり、思い思いのアングルで作品を撮影していった。最後に講堂で自分の自信作の選択とその写真のプリントアウト、参加者全員の自信作の鑑賞、大藪さんによる講評で構成されるワークショップが行われた。この日のアンケート結果には下記のものがある。

- I had fun taking pictures of special exhibit.
  企画展の写真が撮れたのが楽しかった。
- I can see other people's pictures, learn from their perspective.
  他の人の写真が見れて、その人の見方から学ぶことができた。

展示室の中で自分が選び取った被写体（彫刻作品）を撮影できたことを喜ぶ人、その場に居合わせた他の参加者の写真と比べることで、より自分の写真の個性、自分の表現といったものを感じとることができた人など、人そぞれ持ち帰るものは違っても、美術館がひとり一人にとって意義深い自己表現の場になったと感じた。

撮影会②　3月10日(日)

撮影会の工程は基本的に撮影会①と同じであったが、1つ目の撮影場所は三浦半島東端の観音崎近くにある横須賀美術館の屋上広場、及び美術館の建物前にある「海の広場」であった。最初に「海の広場」で参加者が2列に分かれ、簡単な自己紹介のアイスブレイクを行い、少し緊張がゆるんだところで、屋上広場に上がって撮影会を開始した。同館の屋上広場に通じる階段の踊り場には「恋人の聖地」の表示がある。

企画展示室での撮影

横須賀美術館にて

横須賀美術館屋上広場にて

オープニングトーク

作品公開

「恋人の聖地」とはNPO法人地域活性化支援センターが「少子化対策と地域の活性化への貢献」をテーマとした『観光地域の広域連携』を目的に認定する素晴らしいロケーション（※）とのことである。

確かにそこからは比較的空気が澄んでいたこともあって、東京湾を通り越して千葉県富津市側まで見えていた。更にその東京湾にはいくつもタンカーが往来するのも見える。横浜市中区から参加したこどもたちは普段はこうした広い海を見ることがないためと思われ、大はしゃぎであった。

「海の広場」ではベトナムからの留学生が芝生の中にいる草や虫を接写したり、同館の躯体・構造の面白さを発見したこどもたちは、やっきになって思い思いのアングルで撮影していた。その後、バスで、横須賀美術館から湘南国際村へと移動して、当財団の事務所のある湘南国際村センターに到着した。センター建物裏側にあって、ときたま、テレビのロケ地に使われるグリーンパークが2つ目の撮影場所である。目の前には相模湾が広がり、中景には江の島があるのを確認でき、遠景には富士山が見える。残念ながら、当日、富士山はかすんで見えるか見えないかであったけれども、普段、学校と家の間の狭い生活圏内しか移動しない参加者の多くにとって、開放感がどれだけのものであるのかが伝わってきて、担当者としてはとてもうれしいものがあった。カメラというのは不思議なコミュニケーションツールで、おそらくはめったに知らない人に声をかけないだろうに、その時はカメラを持った子供たちが、公園に犬を連れて散歩に来た方に犬を撮影しながら声をかけていた。

この企画に賛同し、横浜市中区の外国につながるこどもたちに参加の声がけをしてくれたのは、アーティストユニットART LAB OVAの蔭山ヅルさんである。蔭山さんは毎日、自分が運営する横浜パラダイス会館で外国つながりの子供たちの放課後の面倒を見ているが、子どもたちのひとりについて、この子は海を見た事がないと言っていた。狭い生活圏内の中で生きている外国につながるこどもたちは学齢が上がるにつれて、学力の遅れもあって人生の選択肢が狭まり、より狭い生活圏内で暮らしているという。そういった環境の外に広い世界が存在することを知らせることも今回の撮影会の目的であった。撮影後、第1回同様に自分の自信作の選択、プリントアウト、タイトルづけを行った。最終的には参加者それぞれが1点ずつ「作品公開」に出品することとなった。

オープニングトーク＆作品公開

作品公開が行われたのは、選ばれた自信作を専門家に依頼して、額装してから2週間後のことであった。神奈川県立近代美術館の講堂では、作品19点を公開するとともに、講師である大藪順子さんによる講評、参加者のコメント、協力者である蔭山ヅルさんのショートレクチャーで構成される「オープニングトーク」が開催された。蔭山さんのレクチャーの中で印象的だったのは、学童保育や習い事などのような、こどもの遊び場・たまり場のような場所に関して、外国につながるこどもの親に情報がなかったり、手続きが面倒だったり、そもそも親に習い事の経験がなかったり、お金がなかったり、といった理由（「相対的貧困」や「社会的相続の欠如」）のためにひとり一人が、家庭の中で孤立化しているということだった。そうした孤立感を感じる毎日ではとうてい自己肯定感を生み出す自己表現も生まれにくい。オープニングトークで自分の作品についてコメントした参加者の一人は下記のアンケートを残している。

- I am excited when explaining my picture idea.
  自分の写真についての考えを説明して興奮している。

また、別のアンケートには

- パネルにするとさらにグレードアップする。撮った人にとってとても誇らしいと思うので全員来られたらよかったと思う。

撮影した自分の自信作が美術館という場で公開されれば、自己肯定感や自尊感情につながることを担当者としてより一層、感じるプログラムとなった。

※団体HP
www.seichi.net/seichi.php

マルパ・ワークショップ　平塚市美術館「ハロウィン仮装作り＆ファッションショー」

（公財）かながわ国際交流財団　野呂田純一

2018年10月20日（土）、湘南・三浦半島の公立美術館4館をメンバーとする、プラットフォーム型アートプロジェクト・マルパの教育普及事業の一環として、平塚市美術館で、同じ平塚市内にある福祉施設であるスタジオクーカ（studioCOOCA　以下、クーカ）との共催により、ワークショップ「ハロウィン仮装づくり＆ファッションショー」が開催された。

今回のワークショップは、平塚市美術館の学芸員江口恒明さんが同館の近隣にあるクーカと協働・連携し、人間関係におけるバリアをはずすという視点から、誰でも表現者になれる「創作と発表の場」を設けたいと考えたのがはじまりである。

クーカのメンバー（知的・精神・身体に障がいのある方々）によるデザインは、どれも個性的でかわいらしく、それらがプリントされた雑貨は、セレクトショップや手芸店でも取り扱っているので、目にされたことがある方もいるかもしれない。およそ、生活介護・就労継続施設の一般的なイメージとは異なる、このクーカの活動内容について最初に紹介しておきたい。

クーカは元々、社会福祉法人湘南福祉センターという複合施設の中にあった、アート部門・工房絵（こうぼうかい）が2009年に独立する形でできたという。その後、近隣にクーカのメンバーが調理やホールのスタッフとして働くカフェを併設した「ギャラリークーカ」ができ、ここでクーカのメンバーによるさまざまな雑貨が展示・販売されている。

「お母さんと一緒に素材をチョッキン」

クーカには県内各地から障がいのある方々が通い、自分の好きなこと、得意なことをしながら、収入を得ているとのこと。収入を得る道が絵をかいたり、モノをつくったり、歌を歌ったりすることであることに、クーカのユニークさがある。

メンバーの好きなことや特技を伸ばすクーカ

ワークショップに先立ってクーカ施設長の北澤桃子さんから、ギャラリークーカとそのアトリエを案内してもらった。アトリエではクーカのメンバーのひとり、村田義弘さんから、昭和40年代生まれの私が小学生の頃に見たアニメキャラクターのような人物が描かれた、自作の名刺をもらった。

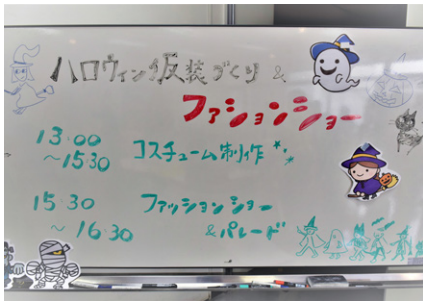
村田さんは20代前半の若さにも拘わらず、「昭和の男のロマン」が好きで先日、それをテーマにギャラリークーカで個展を開いたばかりとのこと。

洗練されたデザイン雑誌に囲まれて、メンバーが絶え間なくインスパイア（触発）されるこのアトリエから生み出された作品たちに触れていると、様々な社会制約に縛られた日常の感覚から解放されて、自分の中の時間をゆっくりとした流れに変えてくれる。しかし、それだけではなく、メンバーの好みや特技を伸ばす施設長の北澤さんの才能、そして、プロダクトに仕上げていく際のアーティスティックなセンスなしには、こうした作品は生まれないとも確信した。

子どもと一緒に「アート」に夢中

今回のワークショップでは、北澤さんをはじめとするクーカのスタッフやメンバーの、10人ほどが参加し、一般公募で集まった市内の子どもたち及びそのパパ・ママと一緒に、ハロウィンの仮装を作った。魔女やドラキュラ、骸骨など北澤さん、スタッフ、メンバーがさまざまな仮装をして登場したことで、始まる前からこれから何かが始まる期待感で会場の雰囲気は盛り上った。

北澤さんのワークショップの説明が終わる否や、最初に動き出したのは、子どもたちではなく、そのパパ・ママであった。まるで「今日は子どもと元気にアートで遊ぶぞ！」とばかりに、素材が積み上げられたテーブルにかけより、子どもの体形に合わせて、切ったり折り曲げたりして、勢いよく服の



「当日はアトリエに集合」

「どれが似合うかな？」

「お父さんもがんばるぞ」

「ドロン」をするトモヤテンチョウ

「今日は何を作ったの？」

「カラフルな素材でいっぱい」

本体となる身頃（みごろ）を作っていく。身頃ができた後は、子どもたちもすてきなアクセサリーやリボンを付けようと、素材を手に取った。スタッフたちから、「かわいい」「本物みたい」「かっこいい」とエンパワーされたことで、子どもたちは身にまとった仮装を更にいいものにするための想像を膨らませていく。昔懐かしの「ウルトラセブン」や「海坊主」などさまざまな仮装が出来上がり、「魔女」になった娘さんに、パパが「杖の柄の色は黄色がいいよね」と言っているのを聞くと、パパもママも「アート」を、子どもと一緒に楽しんでいるのがよく分かる。

仮装したメンバーがいるだけで不思議とゆったり

メンバーのひとり、忍者になった高原智哉さん〈愛称・トモヤテンチョ〉は時々、椅子に座って「ドロン」のポーズをし、オバケになった伊藤太郎さん〈愛称・辻太郎〉も各テーブルをあてどなく、ぐるぐる回っている。伊藤さんは「ウルフボーイはオオカミ少年、ウルフガールはオオカミ少女って、英語で言うんだって」と僕に話しかけてくれた。目の前で作り上げられていく子どもたちの仮装に、おそらくは彼らしいコメントで楽しく応じている。

会場のあちらこちらに散らばったメンバーは、いま、自分がしたいことをして楽しんでいるだけなのだが、彼らがそうしているだけで、会場はゆったりとした雰囲気になる。段ボール、クッションテープ、カラー不織布など周到に用意された素材は、どれも身近に手に入るものであったが、質感と色のバラエティーがそのまま、更なる楽しさの演出へとつながっている。

一時間半ほどで仮装づくりは終了して、そのまま、全員で館内のミュージアムホールまでパレードした後、ファッションショーが行われた。ショーの冒頭、メンバーのひとり光野七海さん〈愛称・七海女王〉は「アナと雪の女王」のテーマ曲など３曲を踊りながら歌い、雰囲気を一気に盛り上げた。その後、ジャズバンド「西村崇史とスウィンギンポストマン」の３人が鳴らす陽気なナンバーをバックに、司会のクーカスタッフが、子どもたち一人ひとりに「今日何を作ったのか」、インタビューをした。子どもたちがそれぞれ、インタビューの最後に「決め」のポーズを取ると、会場からは「かわいい」と歓声が上がった。

美術館によるインクルーシブなワークショップから見えてくる可能性

見学に来ていた目黒区美術館学芸員の加藤絵美さんは、次のようにコメントを寄せている。

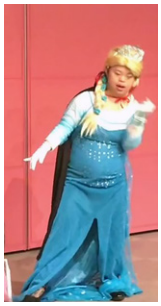
「集まった子どもと大人が協力し、またスタジオクーカさんが盛り上げることで、魔女や恐竜などさまざまな衣装が、どんどん出来上がるパワーに圧倒されました。ファッションショーでの『七海女王』や子どもたちの発表も、たくさんの笑顔が見られる良い時間になったと思います」

３年目を迎えたマルパでは、来年度、中間報告を行うためのフォーラムを開催予定である。フォーラムでは、これまでの美術館におけるインクルーシブな取り組みが発表される。それらの発表を元に、障がい者や定住外国人など多様な背景を持った人々と美術館とのつながりを、どのように育んでいくことができるのか、マルパだからこそできるものは何か見定めながら、既存の美術館像のアンラーン（まなびほぐし）へとつなげていきたい。

主催　平塚市美術館
共催　スタジオクーカ（（株）愉快　生活介護・就労継続Ｂ型事業所）
スタジオ―クーカ
https://www.studiocooca.com/__

「髪の毛はこんな感じかな？」

「みんなで集合写真」



歌って踊る（七海女王）

横須賀美術館のマルパプロジェクト
―美術館と作業所のミニプラットフォームに向けて

（公財）かながわ国際交流財団　野呂田純一

横須賀美術館は元々、福祉事業を同館の主要な事業として位置づけ、開館時から「視覚障害者の美術鑑賞」をテーマとした講演会や触察本の紹介などを行ってきた。

同館は2016年度の当財団のよびかけで他の3館（神奈川県立近代美術館・茅ヶ崎市美術館・平塚市美術館）とともにMULPAに参加した。2017年度のマルパ・キックオフイベントに横須賀市役所の障害福祉課の職員が参加したことで、マルパの実行委員で同館の立浪佐和子さんはいかに美術館の活動が障害福祉のセクションに知られていないかを知り、それがマルパ・ワークショップのきっかけとなったという。2018年度から3か年度にわたって、障害福祉課と連携して、横須賀市内の福祉作業所職員で利用者のアート活動に関心の高い人たちとレクチャー＆意見交換会を開催してきた。

筆者がマルパ事務局としてその活動の推移を見ており、この稿ではその内容を紹介したい。

初年度のレクチャー＆意見交換会

2019年2月、障害福祉課の呼びかけで同館のワークショップルームに集まった地域作業所の職員の方々を対象に、NPO法人エイブル・アート・ジャパン代表理事の柴崎由美子さんが講師となって、「福祉とアートが出会うとき～地域の協働事例から考える明日への一歩」と題したレクチャー＆意見交換会が開催された。平日の夕方から夜にかけて開催されたこのイベントは、作業所の職員の方々が参加しやすいようにとの時間設定であった。柴崎さんはこれまで、全国のアート活動を行っている障害のある方々のユニークで親しみが持てる作品を、大手の企業とコラボして数多く商品化してきた。こうした活動の背景には2006年4月施行の障害者自立支援法により、福祉の世界に工賃アップという厳しい風が吹いたことがあるという。レクチャーは前半が「福祉とアートが出会うとき」「障害のある人が芸術文化に取り組むことの意義」の2部で構成され、後半は集まった作業所の方々の課題意識である「表現活動の指導方法、内容の充実について」「作品のアピール方法、発表の場、見せ方について」「生産活動にデザインの視点を取り入れたい」にコメントを寄せるというものであった。その後、そのテーマごとにグループを作り意見交換を行った。

柴崎さんはアート活動を行う環境（場所・時間、支援者、つながり）に着目すべきという。「世界人権宣言」（第27条第1項　すべての人は、自由に社会の文化生活に参加し、芸術を鑑賞し、及び科学の進歩とその恩恵にあずかる権利を有する」）やWHOの健康の定義（「病気でないとか、弱っていないということではなく、肉体的にも、精神的にも、そして社会的にもすべてが満たされた状態にあること」）といったものが元々あるのに加えて、最近（2018年）は、「障害者による文化芸術活動の推進に関する法律」ができ、福祉側の人々とともに文化芸術の行政や専門家が、社会的に弱い立場にある人々（障害者、こども、高齢者等）のさまざまな「環境」をつくりあげていくということが明記されていることにも触れた。

我々はどうしても障害者の芸術活動というのは、華やかな公募展、展示会、作品が売れる・売れないといった、大きなプロモーションの中にあることが優れていると思いがちである。しかし、個人として何か制作していたものが、他者と分かち合うことで（利用者や施設の中の）グループの中で尊敬されたり、やりたいという意欲を持ち、それが更に展示会やカレンダーづくりを通して、例えば、ファンが多くできるとか、施設で働きたいという職員を招くことにつながったりする。そうやってある一人の創作活動がその周辺の人達、あるいは地域に徐々に影響していくという。こうしたエネルギーが拡がっていくことは芸術活動をすることの、とても大切な意義や意味だとした。

柴崎さんはできるだけ自分たちと異なった仕事の人と連れ立って、福祉のアート活動の現場や展覧会を見学しにいくという。そうした展覧会等で感じた事、考えたことを一本、筋を立てて哲学カフェのように一緒に行った人と語り合いの場を持ってどのように表現活動を支援するのか、いろんなヒントやアイデアを得るようにしている。大切なことは「集まる、知る、やってみる、検証する」というサイクルを他の関心のある人とつくり、発見していくこと―机の並べ方にどんな工夫があるのか、誰がどんな道具を以って活動しているのか、その人はテーマを以って

本プロジェクト担当の立浪佐和子さん

レクチャーする柴崎由美子さん

意見交換会

レクチャーする東亜由子さん

スタンプづくりに夢中の作業所
職員のみなさん

天井に吊るした
自作フレームの鑑賞

やっているのか、指導者がどのように声を出しているのか。そうした語り合いの中から柴崎さんは環境が醸し出す空気や工夫が、実は優れた作品を生んでいくということをつかんだ。

柴崎さんの講義のあと、それぞれの課題意識にもとづき、グループ間で作業所の現状、自分の悩みなどを語り合うグループワークが行われた。課題意識の中で特に明確だったのは、「身体障害・知的障害・精神障害などさまざまな方が通所されている中で、指導内容にどうしてもバラつきが出る。その人（利用者）の主体性をどのように引き出すか、ひとり一人に合った表現方法はどういったものか」「特に身体障害のある方の場合、使える道具が限られてくる中でのサポートは何か、集中力が持続しない中でどういうふうにすればよいのか、作品の完成時点を職員が決めてしまっていいだろうか」といったことだった。

柴崎さんは「こういうことが不足している、こうありたい、だからこういうことをやっていこうということをみんなと分かち合う。その共通の思いを持った仲間がいるというのが次のステップになる、次に横須賀は場をつくるとか、ものをつくるとか形をつくるステージに行けるはず」と言葉を残してくれた。

2・3か年度目のワークショップ

2・3か年度目のワークショップの講師として迎えたのは、地元に住むデザイナー SnipLove のみなさん（東亜由子・伊藤日菜子・中村久子・中村晶子）だった。イラストレーターの東さんとデザイナーの伊藤日菜子さんは双子の姉妹デザインユニットを組み、近年は、障害者がいかに社会の中で楽しく交われるかをキーワードにしながら障害者施設の店舗プロデュースをしている。中村久子さん・中村晶子さんもユニットを組んで、どんな子供にも使ってもらえる遊び道具を企画・制作・販売してきた。その 4 人が講師となったワークショップは、参加者が気楽に楽しめるよう、「スニップアートスタンプシート」に自分で描いた絵を転写紙で転写し、はさみで切り取り、それにさまざまな色のスタンプで色をつけ、作品となる紙にペタペタとスタンプして模様や風景を構成するというものである。

2か年度目にはその工程に加えて参加者（作業所の職員）が自分で制作した作品に合うフレームも制作するというものであった。元々は 2 か年度目にスタッフ向け―障害者向け―スタッフ向けといった順番でワークショップを合計3回開催する予定であったが、コロナの感染拡大の阻止のため、スタッフ向けを 2 か年度にわたって（2020 年 1 月 23 日、2020 年 12 月 14 日）開催することになった。

実際に筆者もワークショップ体験する内に自分自身の制作づくりに没頭してしまうほど楽しかった。というのは、ワークショップではスニップアートに使われるインクとして相当数の色が用意されており、粘土状の素材（スタンプシート）が切りとりやすく、しかも、紙にスタンプをペタペタと押していく感覚が心地よいのである。

意見交換会では、新宿の作業所でも講師をしている東さんからショートストーリーが紹介された。利用者さんが殴り描きのように描いているのを見て、職員はつい手を出して仕上げようとする。その職員に手を出さないよう言うか言わないか、東さんは迷ったという。手を出さないでということはその職員と東さんとの信頼関係が失われる。そこで、職員さんも「一緒に楽しむ」ことを提案したことで、利用者さんの隣で職員が一緒に楽しむ関係に大きく変化したという。こうしたアートを通した作業所の中での関係性の変化が、利用者さん自身の生活環境・充実感を大きく向上させていくのではないかと感じた。

東さんたちはこの横須賀美術館でのマルパ・ワークショップを通じて、参加者が属する作業所でも講師を務めるようになっていた。また、同じ市内という親近感からか参加者同士が互いに知り合いになっており、このショートレクチャー＆意見交換会の開催により、3か年度目にしてようやく、横須賀で、美術館がハブとなった、そしてアートに関心のある作業所職員によるミニプラットフォームが出来上がってきたことを実感した。このミニプラットフォームの今後の発展を願う。

マルパ実践報告フォーラム 2019・小田原市文化セミナー特別編
2019.7.20 小田原市民会館 小ホール

（公財）かながわ国際交流財団 野呂田純一

7月20日（土）、「マルパ実践報告フォーラム 2019・小田原市文化セミナー特別編」と題したイベントが小田原市民会館にて開催された。マルパの美術館である神奈川県立近代美術館と茅ヶ崎市美術館、そして、マルパと類似の目的を掲げつつ異なる手法で実践しているアーツ前橋や NPO法人スローレーベル、それら4つの美術館・団体の実践報告をメインプログラムとするフォーラムである。

マルパを構成する美術館は神奈川県湘南エリアの中央から東側に位置しており、今回のフォーラムは小田原市文化政策課の協力を得て、県西部の方々ともマルパの理念や実践内容について意見を交換する場となった。

会場には定住外国人や障がいのある人たちの美術館へのアクセス向上や、美術館でのインクルーシブな教育普及事業に興味・関心を持つ学芸員・研究者・留学生らが多数来場した。マルパ実行委員等の主催者側も含めると100名近い参加者となった。

プログラムとしては主催者挨拶、開催趣旨、マルパ・ワークショップの概要説明に続いて、実践報告とそれを踏まえたパネルディスカッションや、参加者同士の情報交換会が行われた。

実践報告について順にテーマ（カッコ内は報告者）を挙げると、『インクルーシブデザイン手法を活用したフィールドワークから表現へ』（茅ヶ崎市美術館学芸員の藤川悠さん）、『外国につながる子ども・若者たちへのエンパワーメント―美術館とアートの力』（神奈川県立近代美術館学芸員の鈴木敬子さんと筆者）、『生きることに寄り添う表現とは何か～“表現の森”の活動から』（アーツ前橋学芸員の今井朋さん）、『共創のための「人」と「環境」をつくる～スローレーベルの舞台芸術の取り組みから』（NPO法人スローレーベルの野崎美樹さん）の4つである。

今回の実践報告の発表時間は15分から20分と短いものであったため、それぞれワークショップ（プロジェクト）概要と実践から得られた重要な知見に的を絞った報告となった。

会場の様子

茅ヶ崎市美術館では美術館まで（から）つづく道を「感覚特性者」（聴覚障がい者、小さな子とベビーカーユーザー、視覚障がい者と盲導犬、車椅子ユーザー）と表現者（アーティスト・研究者）がペアになって、一緒に歩き回るフィールドワークを4回実施した。インクルーシブデザインの手法で、表現者が感覚特性者の感情や行動から気づきを得て作品を制作し、企画展「美術館まで（から）つづく道」での展示に至る経緯を藤川さんは報告した。藤川さん自身がフィールドワークを通じて、感覚特性者だけでなく、表現者もワークショップに同行したコアメンバーも、一人ひとり感覚が違うこと、すなわち、「みんなが感覚特性者」であることに気づいたという。

鈴木敬子さんは、神奈川県立近代美術館でのブルーノ・ムナーリ（イタリアの芸術家・絵本作家）の日本最大の回顧展に合わせて開催された鑑賞・造形ワークショップの概要とそのアンケート結果について報告した。参加者である中華学校や朝鮮学校の児童・生徒・保護者に対する、館長や学芸員のウエルカムな態度が、参加者がこれまで来たことのない美術館という場での自由に表現していいという安心感や、大人への信頼感につながったと鈴木さんは振り返った。

筆者は本年3月に県内の外国人集住地区に住む子ども・若者たちのエンパワーメントを目的として開催された美術館での撮影会「多文化ユース・フォトセッション in 三浦半島」について、その概要と効果的だったと考えられるしかけについて報告した。報告の中で撮影会参加者の一人であるチャン・バン・ティエップさん（ベトナムから来日、アルバイトをしながら日本語を学んでいる）は、撮影会への参加により「写真」への興味が増し、深く考えて撮影するようになったとコメントしてくれた。

アーツ前橋の今井さんは自身で企画した2016年の企画展「表現の森」について、そして企画展以後現在まで続く5つのアートプロジェクトの内、アーティスト滝沢達史さんとアリスの広場（フリースペース）によるアートプ

開催趣旨 水沢勉さん（マルパ実行委員長）

実践報告Ⅰ 藤川悠さん

実践報告Ⅱ 鈴木敬子さん

実践報告Ⅱ　筆者とチャン・バン・ティエップさん

実践報告Ⅲ　今井朋さん

実践報告Ⅳ　野崎美樹さん

パネルディスカッション

モデレーター　杉浦幸子さん

パネリスト　平井宏典さん

ロジェクトについて報告した。

今井さんによれば、企画展ではアリスの広場のボランティアＹさんの引きこもり経験を元に、滝沢さんがＹさんと協働で制作したインスタレーションが展示され、その制作過程でＹさんは心に閉じ込めていた自分の過去の思いと対峙できたという。そうした引きこもりの子ども・若者たちとの協働経験から、滝沢さんが表現の森特設サイトに執筆した「世界の見え方は案外心の変化に左右される。だから、生きづらさを抱える人には、社会に合わせる努力よりも世界の広がりを獲得した方が良い」という考え方は、前述の撮影会に参加した子ども・若者たちにも当てはまる。引きこもりの子ども・若者たちという「美術館から最も遠い」と思われる人たちに対して、美術館ができることは予想以上にいろいろあることを実感できた報告だった。

杉浦幸子さん（武蔵野美術大学教授）がモデレーターを務めたパネルディスカッションは、マルパ実行委員の平井宏典さん（相模湾・三浦半島アートリンク幹事）の各報告者への質問から始まった。企画展「表現の森」について来場者の反応がどのようなものだったかという質問に対して、具体的な言及を避けながらも、「誰しもがマイノリティ性を持っているはずなのではないか」という問いを投げかけ来場者を議論のプラットフォームに入り込めるよう企画展を設計したとの今井さんの回答からは、従来の「鑑賞」という企画展の枠を飛び越える斬新さを感じた。また、この問いが藤川さんのフィールドワークを通じた「みんなが感覚特性者」という気づきとリンクすると杉浦さんが指摘したことで、インクルーシブなワークショップに通底する「人」の捉え方があることが見えてきた。

外国につながる子ども・若者たちの写真展

最後に杉浦さんが全体の感想を述べる中で、“inclusion”の語源に「閉じ込める」という意味があることに触れた。一方的に内側にある人やモノが外側にある人やモノを包んで出てこないようにするのではなく、自分と他者、場と作品との関係性において「～し合う」（学び合う、包み合う、ほぐし合う）ことが必要とのコメントは、今後のマルパのインクルーシブな教育普及事業への大きな示唆となった。なお、会場では「外国につながる子ども・若者たちの写真展」と題して、前述の撮影会での作品 19 点が展示された。フォーラムの開催とともに、これらの作品を多くの方々に観覧いただけたことは担当者として感慨深いものがあった。

この場を借りてフォーラム開催にあたり尽力していただいた方々に謝意を述べたい。

※ 主に障害者について、感覚に焦点をあててその人の「特性」として呼ぶ造語

マルパ講演会「社会的排除はなぜ起きるのか？―包摂に向けて公共施設ができることを考える」
2020. 1. 26 神奈川韓国会館

（公財）かながわ国際交流財団 野呂田純一

2020年1月26日（日）、神奈川韓国会館（横浜市神奈川区）にてマルパ実行委員会及び当財団の主催で、講演会「社会的排除はなぜ起きるのか？―包摂に向けて公共施設ができることを考える―」が開催された。講師は社会福祉学の第一人者で『社会的排除－参加の欠如・不確かな帰属』（有斐閣、2008年）、『貧困と社会的排除－福祉社会を蝕むもの』（ミネルヴァ書房、2005年）などの著書を持つ、岩田正美氏（日本女子大学名誉教授）である。

開始から4か年度目を迎えるマルパプロジェクトでは、欧州で展開されてきたアートや美術館によるソーシャルインクルージョン（社会的包摂）を意識しながら、構成メンバーである各美術館学芸員がワークショップ、講演会、意見交換会などの教育普及事業によって、美術館と、社会的に孤立しがちな定住外国人や障がいのある人々や支援団体等との関係を作ってきた。

今回の講演会はもともと、「社会的排除」概念についての理解を十分なものにするため、マルパ実行委員を対象とする研修会として想定していたものであったが、この社会課題に関心のある方々との対話を通して理解を深めるべく、一般向けの講演会として開催した。講演会には社会福祉分野から数多くの参加があり、普段ほとんど接する機会のない美術分野と社会福祉分野の人たち同士の、社会的孤立や社会的包摂についての対話が可能になったことは、企画者として大変ありがたく感じた。

欧米の公共文化施設による社会的包摂の事例紹介

水沢勉実行委員長（神奈川県立近代美術館長）による開会あいさつ、財団によるマルパプロジェクトの概要説明の後に講演が始められた。講師の岩田正美氏からは大きく5つの項目（①「なぜ社会的排除は注目されたか？」、②「社会的排除概念の理解のポイント」、③「公共性と社会的排除」、④「公共空間と社会的排除」、⑤「情報や文化は誰のもの？」）に分けて話をしていただいた。岩田氏が以前、執筆した論文「社会的包摂と公共施設」（『現代の図書館　Vol.50　No.3』、日本図書館協会、2012年）にも触れつつ、紹介したい。

開会挨拶 水沢勉実行委員長

講師 岩田正美氏

社会的排除とは「従来の失業、貧困、障害、不登校、虐待等の社会問題を、社会関係の観点から捉え直した概念」であり、これが1980年代の欧州で注目を集めたのは、（1973年の恐慌と変動為替相場制への移行を境に急速に進んだ）先進諸国における「脱工業化」とそれを含んだ「グローバリゼーション」の大きな流れの中に出現した「二極化社会」が背景にあるという。

先進諸国の脱工業化の過程には、製造業を中心に発展した大量生産組織とそれに結びついた安定的な労働体制から、（コンピューター等の情報技術の発展を基礎とした）金融や新しいサービス業での「変動」的な生産・労働組織への再編があり、そこでは非正規雇用や短時間雇用等へと雇用慣行が変化し、若者が長期的に失業するようになった。

フランスでは特に学校卒業後の失業は社会保険制度にカバーされず、公的扶助からも排除されることとなり、それを原因とする若者（移民2世・3世の長期失業者など）の暴動等が数多く

講演内容に対する感想シェア

各テーブルの感想の会場全体への紹介

発生した。そのため、共和国で「連帯思想」の強い同国では、そうした不利の連鎖に絡む「社会的排除」をなくすことが課題となった。その後、EU の政策にも取り入れられ、「社会的排除」は各国で克服すべき社会問題となり、人々を包摂していくこと（社会的包摂）がゴールとして設定された。

「公共」とは多くの市民や社会集団の共通利益を言うが、その共通利益の中では対立することがあり、そのため、特定の個人・集団（少数派）が排除されることもある。実際に道路・河川敷・公園等の公共空間では管理者の都合から、ホームレスを定着させないための花壇や動く歩道の設置のように「柔らかな排除」が行われやすい。また、図書館、美術館等の公共施設においても、ベンチを棒状に設計してホームレスが寝ることができないようにするといった「柔らかな排除」がある。

究極的には「情報や文化は誰のものか」という問題に行きつくが、欧米の公共文化施設による社会包摂の事例が参照のために紹介された。例えば、北欧の図書館は人々がただ読書する場ではなく情報交換の場、サロンであることを是認しており、英国のナショナルギャラリーはそのコレクションを英国の財産ではなく世界の財産と考え、どんな人でも享受できるものとして、入場無料にしているとのことである。

大まかには、以上のような内容で約 40 分ほどの講演がなされた後に、参加者が 5～6 名のテーブルごとに感想の共有を話し合うセッションを行った。美術館館長・学芸員などからなるマルパ実行委員は多様な参加者との対話のため、テーブルごとに分かれて座った。

参加した方々の中には講演内容が普段の仕事と直接、関係を持つ方もおり、各テーブルとも非常に熱が籠ったものとなった。参加者アンケートには「美術館・文化施設に職をもつメンバー間の話し合いがあった。各自の経験から「柔らかな」排除に意識せず加担してきたのではないかという気付・反省があったかもしれない」といった意見もあり、公共文化施設の学芸員・職員として当然のものとして行った職務が先の「柔らかな排除」につながっていた可能性も話し合われた。最後に各テーブルで共有された感想がマルパ実行委員により会場全体に紹介された。

今後ともマルパでは地域課題でもありつつ全国の社会課題でもある、定住外国人や障がいのある方々の社会的孤立と排除、それを解決するための手段のひとつである「美術館・アートによる社会包摂」に関する理解を深めるための模索を続けていきたい。

マルパ総括フォーラム 2021
2021. 2. 7（オンライン形式による開催）

（公財）かながわ国際交流財団　野呂田純一

2021 年 2 月 7 日（日）、マルパプロジェクトがその開始から 5 か年目を迎えたことから、一度、その活動を振り返るべく、総括フォーラムをマルパ実行委員会と（公財）かながわ国際交流財団で開催した。当初、対面形式で企画を組んでいたが、コロナ禍での開催とあってオンライン形式となり、実践報告者は秋田・徳島・京都・大阪からのオンライン参加者と、配信場所である横浜からのオンライン参加者に分かれ、合計 100 名近い参加者を得た。今回のフォーラムでは、前年の実践報告を踏まえパネルディスカッションで討議し、更に俯瞰的にマルパとマルパ類似のプロジェクトがどこまで来て、これからどのように向かっていけばいいのかという総括的な視点に立った鼎談を行なった。

以下、報告・議論の着目点に絞りながら、当日の記録を展開したい。

13：30 からの約 3 時間半に及ぶこのフォーラムでは、水沢勉実行委員長の開会挨拶、筆者のマルパプロジェクトの概要説明につづき、4 本の実践報告があった。

最初に「美術と福祉の出会いから、何が生まれるのか～横須賀美術館の事例から～」と題した報告が、横須賀美術館の立浪佐和子さん（同館主任学芸員 / マルパ実行委員）から行われた。同館からの報告で特筆すべきは、元々、2007 年の開館時に決めた教育普及活動の 5 つの柱の一つに福祉活動の展開（「すべての人に開かれた美術館」）を据えて、福祉的な活動を展開してきたことである。立浪さん自身は教育普及活動の対象が社会的な弱者だからという意識は持っておらず、いろいろな個性や感性を持った人が美術や美術館に出会う機会を作る、そこでオモシロイ発見をすることができるよう、教育普及活動を展開してきたという。「みんなのアトリエ」（障害児者が家族と一緒に参加できる創作体験）、福祉講演会（障害を切り口にさまざまな人の博物館利用について主にヨーロッパの事例を紹介）、障害の有無に関わらず、いろんな感覚を生かしながら楽しめて、その「場」を共有するイベント（〈音のかけら〉ワークショップ見る音・聞く音・振れる音／講師　彫刻家金沢健一）等がその主な活動プログラムであった。

マルパ参加を機に、「地域」（地元の方が意外と来ていないので地元の人と顔が見える関係を築きたい）、「連携」（それまでの特別支援学校の障害児だけでなく、福祉施設と連携して大人の障害者〔知的障害・発達障害・重度心身障害者〕を対象に据えていく）、「継続性」の 3 つのキーワードを考えるようになったという。

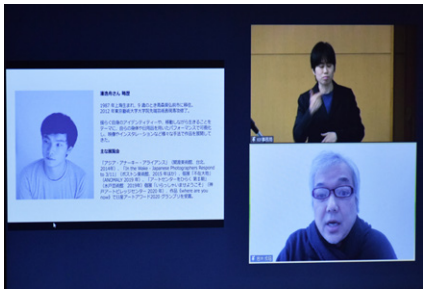
マルパプロジェクトとしては 2018 年度から 3 ヶ年度にわたり横須賀市内の作業所職員を対象に「福祉とアートが出会うとき」というプログラムが開催された。参加者たちは同じ横須賀市内の作業所にいながらこれまでつながっていなかったが、利用者さんにアート活動で充実した時間を過ごしてもらいたいという思いからつながり始めている、そして、「福祉とアートが出会うとき」の講師 SnipLove さんを講師として参加者の施設でアートワークショップを開催するなど、自主的に横須賀市内で人がつながりはじめる、新しい表現との出会いがあるといった報告があった。（20 ～ 21 頁参照）

筆者はこの 3 年間、毎回、これらのワークショップに足を運んだが、最後の会ではようやくミニプラットフォームが出来上がったと実感したのであった。立浪さんの報告後、筆者が企画した対談動画プロジェクト「いま、活躍する外国につながるアーティスト紹介シリーズ」3 回分について、それぞれホストから報告された。

第 1 回はイラン出身でイタリアで美術を学んだホセイン・ゴルバさんをゲストとした水沢勉さん、第 2 回は中国・上海出身で 9 歳の時に両親に伴われて、弘前に移り住んで潘逸舟さんをゲストとした岩井成昭さん（イミグレーション・ミュージアム・東京主宰 / マルパ実行委員）、第 3 回はイタリア人の父、日本人の母の元、東京で生まれ育ち、大学院終了後、ニューヨークで 8 年暮らした大山エンリコイサムさん

主催者挨拶　水沢勉さん

実践報告　立浪佐和子さん


実践報告　岩井成昭さん（右下）

実践報告 小林絵美子さん

実践報告 荒木夏実さん

実践報告 竹内利夫さん（右下）

をゲストとした小林絵美子さん（藤沢市アートスペース学芸員 / マルパ実行委員）からの報告である。中でも岩井さんがプレゼンテーションの最後に提示した「国内で増加する海外ルーツの方々の様々なスタンスを、誰がどのようにアートを介して表現できるのか？」「潘さんのような海外ルーツのアーティストが今後増える、故国から日本に入っている人たちの代弁するアートによって、そのアートを見た日本人たちも彼らの気持ち、立ち位置をより深く知る事ができるのではないか？」という問いは、アートを介した多文化共生の可能性に関する、まさに現在進行形の問題提起と受け止めることもできる。

続いて、荒木夏実さん（東京藝大准教授）からの報告「ろう者との“異文化交流”を通じて」では、ろう者のアーティストたちから、ろう者の芸術祭開催について相談されたことから、交流が始まった。その交流の中で手話のコミュニケーションが面白い、ろう者とは手話という言語を使う独自の文化を持つ人と認識もできた。アートを通してろう者と聴者のコミュニケーションを取るため、「育成×手話×芸術プロジェクト」というプロジェクトを立ち上げたことなどが紹介された。

最後の報告として、竹内利夫さん（徳島県立近代美術館上席学芸員）からは「次の 10 年に向けて必要なこと―徳島県立近代美術館のユニバーサルミュージアム事業」と題した報告があった。1990 年に開館した同館では竹内さんと同僚の亀井幸子さんを中心にユニバーサル事業が展開されているが、亀井さんの、鑑賞だけではない造形も含めた「インクルーシブな鑑賞教育」と、竹内さんの「ミュージアム観をひらく」という信条が合わさって徳島流のユニバーサルミュージアム事業が展開されているとのことである。「ミュージアム観をひらく」とは、コミュニケーションやマナーを含めて美術館での過ごし方の提案とのことであった。ユニバーサル事業の中には手話ビデオ・触察図・音楽 / 演劇プログラムなどがあり、演劇教育や日本語教育では大学と協働でプログラムづくりをし、ノンバーバルコミュニケーションとしてプログラムを深めているという。次世代には「連携を求めるハート」と「交差するプログラム観」を手渡したいというメッセージで報告は締めくくられた。

パネルディスカッションは、モデレーターは荒木さん、パネリストは立浪さん・岩井さん・小林さん・竹内さんとして行われた。当事者主体として美術館が実現できていることは何か？などを切り口に始まったが、ポイントはそれぞれのパネリストが美術館をどのような場所として認識しているかということだった。立浪さんの「どの時代であれ、自分自身がどう思うかというところから入っていただきたい。なんで裸の人がここにいるのかって考えるところから入る。現代美術であってもどの時代でも同じ」、竹内さんの「現代であっても近代であっても美術館に来た人が自分の感覚を使って、自己肯定感が得られる、共有される深い体験があることは対象は違っても大事」という言葉から横須賀と徳島という離れた土地の美術館学芸員同士が共通した認識を持っていたことが分かり、非常に印象深かった。

最後の総括鼎談では、広瀬浩二郎さん（国立民族学博物館准教授 / 写真右上）から自発的にさまざまな人がまなびほぐすと、社会全体がほぐれる、これからのマルパには社会全体がほぐれることを意識した展開をしてほしいとのメッセージがあった。

また、ジュリア・カセムさん（京都工芸繊維大学 KYOTO D-Lab 特命教授 / 写真下）からも「最初は花火を打ち上げ、ロングタイムの視点で、いつもいつも evolution（進化）が必要」、「むずかしさは宝もの」とメッセージがあった。マルパが MULPA2.0 とでもいうステージに向かいつつあることを確かに感じたフォーラムとなった。

マルパプロジェクトの活動一覧（2016 年度～2020 年度）

■教育普及活動（主催：神奈川県立近代美術館）

年度	タイトル	実施日	実施会場	講師	後援
2017	ワークショップ「あなたとポートレート ～あなたらしく、わたしらしく～」	10 月 14 日 （土）	神奈川県立近代美術館 葉山　講堂	鈴木建男 （写真家）	—
2017	演奏会及び交流会「冬から春の音風景 澤村祐司が触れる箏の世界」	3 月 4 日（日）	神奈川県立近代美術館 葉山 企画展示室/会議室	澤村祐司 （生田流箏曲家）	—
2017	講演会「ユニバーサル・ミュージアムとは何か―触文化論に基づく展示・教育普及事業」 及び意見交換会	3 月 21 日 （水・祝）	神奈川県立近代美術館 葉山　講堂	広瀬浩二郎 （国立民族学博物館准教授）	—
2019	MULPA 事業 in 逗子 「針穴写真ワークショップ」	2 月 8 日（土） ～ 9 日（日）	逗子市体験学習施設 スマイル	酒井朋子 （千葉大学工学部技術専門職員）	逗子市教育委員会
2020	MULPA インクルーシブガイドライン課題発見	11 月 18 日 （水）	神奈川県立近代美術館 葉山　会議室	山田　正夫 （神奈川県精神保健福祉センター所長）	—

■教育普及活動（主催：当財団/神奈川県立近代美術館）

年度	タイトル	実施日	実施会場	講師/ﾌｧｼﾘﾃｰﾀｰ	共催/協力
2018	ワークショップ 「親子で楽しむ「ブルーノ・ムナーリ展」」	6 月 3 日（日）	神奈川県立近代美術館 葉山 企画展示室/講堂	同館普及課担当学芸員	外国人学校の子どもたちの 絵画展実行委員会
	撮影会 「多文化ユース・フォトセッション in 三浦半島」	3 月 3 日（日） 3 月 10 日（日）	神奈川県立近代美術館 葉山 企画展示室/講堂 横須賀美術館 湘南国際村センター	大藪順子 （フォトジャーナリスト）	アートラボ・オーバ （アーティストグループ）
2019	作品公開＆オープニングトーク 「多文化ユース・フォトセッション in 三浦半島」	4 月 13 日（土） ～14 日（日）	神奈川県立近代美術館 葉山　講堂	大藪順子 （フォトジャーナリスト） 蔭山ヅル（アーティスト）	アートラボ・オーバ （アーティストグループ）

■教育普及活動（主催：茅ケ崎市美術館（公益財団法人茅ヶ崎市文化・スポーツ振興財団））

年度	タイトル		実施日	実施会場	講師/表現者/感覚特性者	共催/協力
2017	美術館までつづく道	・研修会 「インクルーシブデザインを美術に活用する方法」（再掲）	2 月 25 日（日）	茅ヶ崎市内及び茅ヶ崎市美術館アトリエ	鎌倉丘星 （㈱インクルーシブデザイン・ソリューションズ）	㈱インクルーシブデザイン・ソリューションズ 湘南工科大学総合デザイン学科
		フィールドワーク（第 1 回） 「聴覚の感覚特性者と歩く道」			金箱淳一（メディアアーティスト） 原田智弘（音空間デザイナー） 西岡克浩（聴覚障がい）和田みさ（手話通訳士）・市川節子（手話通訳士）	
		フィールドワーク（第 2 回） 「小さな感覚特性者と歩く道」	3 月 25 日（日）		原良介(画家) 原そよ（2 才女の子）＋原美帆（母）	
2018		フィールドワーク（第 3 回） 「視覚感覚特性者と盲導犬と歩く道」	6 月 10 日（日）		稲場香織（資生堂研究員） MATHRAX（久世祥三＋坂本茉里子） 小倉慶子（視覚障がい）＋リルハ（盲導犬）	
		フィールドワーク（第 4 回） 「車椅子ユーザーの感覚特性者と歩く道」	7 月 29 日（日）		アーサー・ファン（美術家） 和久井真糸（車椅子ユーザー）	
		展覧会に向けての フィールドワーク報告会	8 月 26 日（日）	茅ヶ崎市美術館 アトリエ	企画展「美術館まで（から）つづく道」 作品制作者及び協力者	—
	インクルーシブミュージアム！ 世界に学ぶ未来のヒント		12 月 22 日 （土）	茅ヶ崎市美術館 アトリエ	安曽潤子 （インクルーシブ・ミュージアム代表）	—
2019	美術と手話 「手話で楽しむ鑑賞ツアー」※		8 月 4 日（日）	茅ヶ崎市美術館 企画展示室	西岡克浩 （美術と手話プロジェクト代表）	美術と手話プロジェクト
	シンポジウム 「フィールドワークからの作品制作」※		8 月 10 日（土）	茅ヶ崎市美術館 エントランスホール	企画展「美術館まで（から）つづく道」 作品制作者及び協力者	—

※美術と手話「手話で楽しむ鑑賞ツアー」及びシンポジウム「フィールドワークからの作品制作」は企画展「美術館まで（から）続く道」の関連イベントとして実施

■教育普及活動（主催：平塚市美術館）

年度	タイトル	実施日	実施会場	講師/ﾌｧｼﾘﾃｰﾀｰ	共催
2018	ワークショップ 「ハロウィン仮装作り＆ファッションショー」	10月20日 （土）	平塚市美術館 アトリエ	スタジオクーカ 運営スタッフ・利用者	スタジオクーカ （株)愉快 生活介護・就労継続B型事業所）

■教育普及活動（主催：横須賀美術館）

年度	タイトル	実施日	実施会場	講師/ﾌｧｼﾘﾃｰﾀｰ	共催
2018	レクチャー＆意見交換会 「福祉とアートが出会うとき～地域の 協働事例から考える明日への一歩～」	2月13日（水）	横須賀美術館 ﾜｰｸｼｮｯﾌﾟﾙｰﾑ	柴崎由美子 （NPO法人エイブル・アート・ ジャパン代表理事）	横須賀市福祉部障害福祉課
2019	ワークショップ「福祉とアートが出会うとき2 スタンプをつかって作品をつくろう！」	1月23日（木）	横須賀美術館 ﾜｰｸｼｮｯﾌﾟﾙｰﾑ	伊藤日菜子・東亜由子・中村晶子 （Snip Love）	横須賀市福祉部障害福祉課
2020	ワークショップ「福祉とアートが出会うとき2 スニップアートスタンプ作品を飾ってみよう」	12月14日（月）	横須賀美術館 ﾜｰｸｼｮｯﾌﾟﾙｰﾑ	伊藤日菜子・東亜由子・中村久子・ 中村晶子（Snip Love）	横須賀市福祉部障害福祉課

■教育普及活動（主催：当財団/神奈川県立近代美術館/藤沢市アートスペース）

年度	タイトル	実施日	実施会場	ゲスト（ｱｰﾃｨｽﾄ）/ホスト
2020	いま、活躍する外国につながるアーティスト 紹介シリーズ第1回対談（動画）	11月5日（木）	神奈川県立近代美術館 葉山	ホセイン・ゴルバ/水沢勉（神奈川県立近代美術館長）
	いま、活躍する外国につながるアーティスト 紹介シリーズ第2回対談（動画）	12月7日（月）	湘南国際村	潘逸舟/岩井成昭（ｲﾐｸﾞﾚｰｼｮﾝ・ﾐｭｰｼﾞｱﾑ・東京主宰）
	いま、活躍する外国につながるアーティスト 紹介シリーズ第3回対談（動画）	1月14日（木）	藤沢市アートスペース	大山エンリコイサム/小林絵美子（藤沢市アートスペース学芸員）

■全体研修会

年度	講演タイトル	実施日	実施会場	講師	共催/協力団体
2017	インクルーシブデザインをアートに 活用する方法	2 月 25 日（日）	茅ヶ崎市美術館 アトリエ	鎌倉丘星 （㈱インクルーシブデザイン・ ソリューションズ）	㈱インクルーシブデザイン・ ソリューションズ
2017	ユニバーサル・ミュージアムとは何か ―触文化論に基づく展示・教育普及事業 及び意見交換会（再掲）	3 月 21 日 （水・祝）	神奈川県立近代美術館 葉山　講堂	広瀬浩二郎 （国立民族学博物館准教授）	―
2018	障がい当事者にとって居心地のよい 美術館とは？	11 月 5 日（月）	横須賀美術館 ﾜｰｸｼｮｯﾌﾟﾙｰﾑ	内山早苗（㈱ＵＤジャパン代表取締役）及び障害当事者の方々	㈱ＵＤジャパン
2018	美術がもたらす「心」への作用	11 月 17 日 （土）	神奈川県立近代美術館 葉山　講堂	川畑秀明 （慶應義塾大学文学部教授）	―
2018	・朝鮮学校の美術を通した教育の紹介 ・ヨコハマトリエンナーレ 2017 の出品作品「グリーンライト」関連講座・ワークショップの紹介 ・絵から始める外国につながる子どもたちの日本語教育	1 月 22 日（火）	神奈川県立近代美術館 葉山　会議室	・姜泰成（神奈川朝鮮中高級学校美術教員） ・海老原周子（（一社）Kuriya 代表理事） ・マルパ事業担当者 ・松本典子（（特非）かながわ難民定住援助協会理事）	―
2019	社会的排除はなぜ起きるのか？ ―包摂に向けて公共施設ができることを考える―	1 月 26 日（日）	神奈川韓国会館	岩田正美 （日本女子大学名誉教授）	―

■フォーラム

年度	タイトル	実施日	実施会場	ﾌｧｼﾘﾃｰﾀｰ/ﾓﾃﾞﾚｰﾀｰ/外部発表者	共催/後援/協力団体
2017	フォーラム 「みんなで“まなびほぐす”美術館」	7 月 8 日（土）	関東学院大学 関内メディアセンター	・伊藤亜紗 （東京工業大学リベラルアーツセンター准教授） ・光島貴之（美術家・鍼灸師） ・ライラ・カセム（東京大学先端科学技術研究センター特任助教）	関東学院大学 文教大学国際学部 （博物館学芸員養成課程） 女子美術大学芸術学部 （アート・デザイン表現学科 ヒーリング表現領域）
2019	マルパ実践報告フォーラム 2019・ 小田原市文化セミナー特別編	7 月 20 日（土）	小田原市民会館 小ホール	杉浦幸子 （武蔵野美術大学芸術文化学科教授） 今井朋（アーツ前橋学芸員） 野崎美樹 （NPO 法人ｽﾛｰﾚｰﾍﾞﾙﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄﾏﾈｰｼﾞｬｰ）	おだわら文化事業実行委員会 （小田原市/（一財）小田原市事業協会） 神奈川県博物館協会 ウェスカムズ（神奈川県西部地域ミュージアムズ連絡会）
2020	マルパ総括フォーラム 2021	2 月 7 日（日）	オンライン形式 による開催	荒木夏実 （東京藝術大学美術学部准教授） 竹内利夫 （徳島県立近代美術館上席学芸員） 広瀬浩二郎 （国立民族学博物館准教授） ジュリア・カセム（京都工芸繊維大学 KYOTO D-Lab 特命教授）	日本ミュージアム・ マネージメント学会

執筆　水沢勉（神奈川県立美術館長/マルパ実行委員長）
藤川悠（茅ヶ崎市美術館学芸員/マルパ実行委員）
鎌倉丘星（㈱インクルーシブデザイン・ソリューションズ）
坂本茉里子（MATHRAX/アートディレクター）
野呂田純一（公益財団法人かながわ国際交流財団/マルパ事業担当）
編集　野呂田純一
装丁　川村格夫（デザイナー）
印刷　有限会社青史堂印刷
協力　ミュゼ編集部
発行　公益財団法人かながわ国際交流財団　2021.3
©公益財団法人かながわ国際交流財団　無断転載・複製を禁ず